COBALT-SERIES

前田珠子



集英社

COBALT-SERIES

天を支える者4

前田珠子



集英社



COBALT-SERIES

天を支える者4

前田珠子

集英社

目次

天を支える者4

天を支える者4 …… 7

せつない夏の思い出 …… 183

あとがき …… 200

イラスト／明咲トウル



登場人物紹介


スカルトード
超絶美形の青年にしてナルレイシアとは「本好き同盟」の同志！
ナルレイシア
「柱神」を選ぶ「選定者」。「不幸中の幸いの権化」と呼ばれる本好き少女。


ユーカリィヤ
次代柱神候補に
選ばれた13歳の少女。
リオライーシャ
ユーカリィヤの双子の妹。
幼い時に里子に出され、
妹とは離ればなれに。

天を支える者4

27

少女の一日は、セアナ国産の極上の絹の寝具で目覚めることに始まる。
ほっそりとしたその素足が、朝一番に触れるのは、ガラシア特産の絨毯である。
寝台を離れた少女は、用意されている、やはり極上の絹で仕立て上げられた室内用長衣を身に纏い、朝の澄んだ空気を胸一杯に吸いこむために、自らカーテンを開け、窓を内側に開け放つ。
そして、最早日常的なこととなってしまった、大急ぎで近づいてくる足音を扉の向こうに感じながら……ぼそりとつぶやくのだ。
「……最低」
と。
内側にしか開くことの出来ない窓枠を覆う、一見飾りに見えないこともない、精緻な鉄格子を睨みつけたまま。

その直後、扉の外側からしか施錠も解錠もできない扉が開き、少女の身の回りの世話をするための女性数人が入って来る。
「お早うございます」
「今日も良い天気でございますね」
「きっと、素晴らしい一日となりましょう」
にこにこ笑いながら、彼女たちは少女の意志などはなから無視して、洗顔させ、着替えさせ、化粧まで施し、用意した朝食を食べさせる。
朝一番のお手洗いの面倒だけは、初日に少女が決死の抵抗をしたおかげで、譲歩してもらうことになったのだけれど……それ以外は、少女の行動のすべては、彼女たちの手に握られていた。
「……そうね」
頷く少女の声は、どこまでも空々しかった。
だが、女性たちはそんな少女の心中など気にもしていないのか、「ええ、本当に」とか返してくれるのだ。
少女は、気づかれないように、歯を食いしばった後、彼女たちのもたらす苦行に耐える覚悟を決めた。

胸中、怒り心頭に発していたのだけれど。

（最低！　最低！　ここってば、ほんとに最低！　食事なんて、味を楽しんで、胃の中に入れたものを栄養にするためのものなのに、半分も食べてない皿、勝手に取り上げて下げちゃうし、お腹減ったからって下げられる前に食べたら、行儀悪いって責められて、挙げ句に「吐け！」なんて言われて、口に指突っ込まれちゃうし！　そのくせ、おやつのお菓子なんかはいくら食べても責められないだなんて……はっきり言って、殺人行為だわ！　お肉もお豆もお野菜もお魚も、体を作るために必要な栄養がたっぷり詰まっているのに……そりゃあ、お豆はちょっと苦手だから、お豆尽くしの料理なんか出たら、ちょっとは退いちゃうかもしれないけど、お砂糖たっぷりのお菓子だけ、好きなだけ食べられるって状況は、どう考えたって、体にいいわけないじゃない）

そうは思うけれど、はっきりと口に出してそのことを主張したりはできない。

なぜなら、少女は今現在、この屋敷において、虜囚の身の上であったからだ。

いや、それが自分だけのことだったなら、彼女は果敢に抵抗していたかもしれない。

けれど――この屋敷には、彼女だけでなく、もうひとり、虜囚とされている人物が存在するのだ。

それがわかっているだけに、少女は堪え忍ぶしかなかった。

少女の名は、ナルレイシア・フォイリリル・ダカール。
裕福な商家に生まれたとは言え、本来なら国や世界の命運などに関わり合いになるはずもなかった彼女は、運命と神々の気まぐれな示唆によって、少なくとも一国の命運を背負わされることとなった。
すなわち、自らの生まれ故郷であるディエーン王国の未来を。
その意味を、その大きさを、彼女は現在噛みしめているのだ。
（○○ったれ！）
と、内心毒づきながら――。

つやっつやに磨かれた自分の爪を見つめながら、ナルレイシアはため息をついた。
（ここに居続けたら、絶対近いうちに精神崩壊を起こすわ……）
そう確信してしまうぐらい、この屋敷での生活は『変』だった。
理由は……前述の通りである。
実のところ、一刻も早くこんなところからは逃げ出したいと思っているナルレイシアだが、

そうはいかない問題もあって、現在ため息連続の日々を送っているというわけだ。

その問題というのが、自分と一緒にこの屋敷に攫われてきた年若い少女のことで、その安否の確認すら取れない現在、ナルレイシアは動くに動けないのだ。

それでも——逃亡防止の鉄格子つきの部屋に閉じこめられているとはいっても、監視役である侍女と一緒なら、屋敷内をある程度自由に移動できるのは、優遇されている証拠だとはわかっている。

その理由もわかっているだけに、素直に感謝など出来ないけれど。

この屋敷に連れて来られて五日——いまだ、なにもできずにいることに、じりじりしながら、ナルレイシアは一所懸命、癇癪を起こすのを我慢している。

すべては、自由を得るためだった。

あの日、あの時——。

自分たちを攫ってきた連中の親玉の顔を確かめるために、眠っているふりをして、薄目を開けて寝返りを打ったナルレイシアは、とんでもない顔を目にしてしまった。

実際に目にしたことのある顔ではなかったけれど、それは一般にも広く知られているひとのそれ、だったのだ。

すなわち、肖像画が広く出回っている、王族のひとりの……。

以前、下町に近い界隈に店を開いている食堂兼宿屋である『踊る赤馬亭』の壁に、何枚も並べられている肖像画を目にした時、店の雰囲気とはそぐわないそれらがなぜ並んでいるのかと疑問に思い、女将であるランディータに尋ねたことがある。

「どうしてこんなの、飾ってるんですか？」

と――。

北と南の血を融合させた華やかな美女は、一瞬詰まって、呆れたように説明してくれたものだ。

「こんなものって、王家の方々の肖像画に、そんな言い方はないだろう？」

聞いて、驚いた。

「ええっっ!?　王家の方々って、こんなにいらっしゃるんですか!?」

軽く十枚を超える肖像画を前に、心底驚いた。

少女の故郷で飾られている王家の方々の肖像画なんて、国王様と王妃様と王子様、王女さま方――しかも複写された絵の制作年月日がかなりばらばらであるため、目にしたところで実物

とは全然別物だったりすることも珍しくない——ぐらいがせいぜいだったのだ。
それ以外にも、こんなにも多く王族と呼ばれるひとがいるだなんて知らなかったものだから……純粋に驚いたのだ。
そして……そうしたら、ランディータに呆れられた。
「なに言ってんだか……ここに飾ってある分だって、完全じゃないんだよ。国王様の血を引く三代目までは、王族さまなんだから」
そうして、ランディータに並んだ肖像画をいちいち説明してもらった。
「これが現在の国王様。王子様が三人いらっしゃるけれど、王子さまたちはまだ幼くてらっしゃるんで、肖像画は発表されてないらしい。大昔は、幼くらしても広く知らしめられてたって話だけど……もしかしたら、暗殺とか恐れて取りやめになったのかもね」
ランディータは次々に説明してくれた。
「これが王弟殿下」
「でもって、これが今の国王様の伯父様にあたる先のナサリエル大公爵さまで、成人されたご子息がこちらでそれから……」
そのときは、見るともなく見ていたわけなのだけれど。
その肖像画に描かれた本人を、まさか攫われた先で目にすることになるとは思ってもみなか

った——しかも、その誘拐犯の張本人として。

（お願い！　誰か、嘘だと言って！）

目にしてしまった顔が信じられなくて、少女は何度となく神にも人にも祈った。

けれど、彼女の望む「その通り、嘘だよ」という言葉も「そう、それは間違いなんだ」という言葉も降ってきたりはしなかった。

代わりに目にすることになったのは、なんとも笑えない茶番劇だった。

あろうことかなろうことか、彼女の狸寝入りに気づいていなかった屋敷の家宰を名乗った男は、目覚めた——ふりである——ナルレイシアに、さも親切ごかしにこう告げたのだ。

『お気がつかれましたか、我が家の主が、通りで気を失ってらっしゃる貴女を見つけ、お連れしたのですよ』

と——。

『失礼ながら、ご身分を証明できるような品をなにもお持ちでなかったため、どこに連絡してよいものかわかりませず……よろしければ、お教えいただけますか？』

とも。

先刻承知しているくせに、白々しいとは思ったが、正直にそのことを知っていることを知らせても、いいことなどひとつもないことはわかっていたから、おとなしく芝居に乗ることにし

た。

ばれているのは明白だから、名前はきちんと本名を名乗り、しかし住所については口ごもって見せた。斎王院だなどと言えるはずもないというのもあるが、不用意にファティ・リンシャの名を挙げて、かの老婦人を巻き添えにするわけにはいかないという思いも働いていた。

もっとも、自分が選定者であることを知っている相手が、そこに突っ込んでくることはないだろうと見越しての対応だったのだが——はたして。

男はやや難しい顔になって、こう言った。

『……なにやら、ご事情がおありのようですね。そもそも、貴女のようなうら若き女性が、人通りの少ない路地裏に倒れてらしたというのも奇妙な話……』

男は真実味を持たせるためか——芝居上手だと、ナルレイシアは内心感心したぐらいだ——やや警戒と不審の色を双眸にたたえ、彼女に問いかけた。

『どういうわけで、あのような場所に赴かれたのです？　はっきり申し上げまして、貴女のような女性が、足を踏み入れられるような場所ではないと存じますが……？』

（よくやるなあ）

と、呆れながらも、ナルレイシアは心を引き締めた。

自分があのとき、狸寝入りで情報を得ていなければ、確かにこの男の対応は自然なものに見



えたに違いないことがわかったからだ。

（わたしは女優、わたしは女優、わたしは女優！）

一所懸命自己暗示を繰り返し、彼女はそれらしく本当のことを答えた。

『馬車で近くを通りかかっていたら、女の子の悲鳴が聞こえて……それが知り合いの子の声に似ていたものですから。馬車から飛び降りて駆けつけたら、女の子ではなくて小さな男の子が襲われていて……止めようと駆け寄ったまでは覚えているのですが、その後の記憶が……』

嘘ではないから、ナルレイシアの心理的負担は少なく、おかげでそれが演技だとは相手には見抜かれずにすんだようだった。

男は、そうと知らなければ騙されたに違いない演技力で首をかしげた。

『はて。主によれば、その場に倒れてらしたのは貴女おひとりだったという話でしたが……拐かしが目的なら、貴女も無事にはすまされなかったでしょうから、恐らくそれは裏町の組織のいざこざかなにかだったのでしょう。ある程度の規模の組織となりますと、手を出していい相手か否かを見極める目を持っていると聞きますから。恐らく貴女のお召し物を見て、手を引いたのではないでしょうかな。まあ……それでもそんな目利きばかりとは限りませんから、主が貴女を見つけたのは、本当に幸いだったと言えましょうが』

なにげにリオライーシャ襲撃の犯人と自分たちが無関係であることを印象づけ、同時に恩を

売ってくる発言だった。

（知らなかったら、きっところりと騙されてたわ）

思いながら、ナルレイシアはこくりと頷いた。

『そう……そうだったのですね。本当に、なんとお礼を申し上げればいいのか……』

いったん言葉を切り、男を見上げてナルレイシアは『それで、あの、そのわたしを助けて下さったお方は……？』と尋ねた。

出てくる筈はないと思っていたけれど、もしかしたら、こちらが何も知らないと高をくくって顔を見せる可能性もなきにしもあらず――と読んでの賭は、ナルレイシアの敗北だった。

男はにっこり笑って、

『主は多忙で、出かけております。とはいえ、貴女にはくれぐれも不自由のないようにと申しつかっておりますので、お好きなようにお過ごしください。無論、お帰りになりたいとおっしゃるのであれば、すぐにでも馬車をご用意いたします』

（うそつき）

全然その気がないくせに、こんなに親切そうな顔で言える人間もいるのだと、ナルレイシアは初めて知った。

（お師匠さま。どうせなら、馬鹿の種類見分け術と一緒に、狸や狐の見分け術も教えておいて

ほしかったわー！）

とは思っても、後の祭りだ。

帰りたいから馬車を用意して――と言ったところで、別の、あの男の息のかかった場所に移動させられるだけだ。

それぐらいなら、ほとんど事故として、リオライーシャと一緒に連れ込まれた――と思われる――この屋敷に居座った方がよっぽどましだ。

問題は、なぜ、すぐに自分がいまの居場所に帰りたがらないか、の説明だが――。

（わたしが選定者だってことは、ばれてるわけなんだから、それを使って――うー、わたしは女優、わたしは女優、わたしは女優！　よっし、行こう！）

『ご、ご迷惑でなければ……その、しばらくお世話になってもかまいませんでしょうか……』

天の助けというべきか、そのとき窓になにか、こつんと当たる音がした。

いくら自分に言い聞かせても、ナルレイシアは駆け引きも嘘も大の苦手である。緊張しまくって、それでも一世一代の覚悟で大嘘を口にしようと思っていた矢先のこのアクシデントに、彼女は心底肝を冷やし、びくん、と肩を強ばらせてしまったのだ。

ところが、これが怪我の功名というべきか、男を納得させたようなのだ。

『……もちろんですとも。貴女は主がお連れになったお客様です。屋敷の皆、誠心誠意お仕え

させていただきます』

その男の一言で、ナルレイシアはこの屋敷の賓客という名の虜囚となったのだ。

以来――。

毎日、慣れない上に居心地の悪い生活習慣を押しつけてくれる――これが、上流貴族階級の当たり前の日常だとしたら、ぞっとするばかりだ――使用人に囲まれて、ナルレイシアは自身の忍耐力に挑戦し続けることとなったのだ。

（あのときは、リオライーシャさまから離されたくない一心で、頑張って上流のお嬢様ぶりっこしたけど……ああ、でも……でも、この先は実際のところ、自信なーいっっ！）

こんな、ものを無駄にしてもなんとも思わないのが、貴族社会の流儀であるのなら、到底自分には馴染めないと思うのだ。

このままでは、絶対に近いうちにボロが出る。

我慢するのもそろそろ限界だし、近日中に勝負をかけよう、とナルレイシアは決意した。

本当のところは、たとえ長期化しても、それでもなんとかついていけるように頑張ろう――

と思ってはいたのだけれど。

自分の身の回りを世話する人間たちの言動を見るだに、これがきっと、自分やリオライーシャを攫った人物のやり方なのだとわかってしまったから……自分以上に、きっとリオライーシャに耐え難い環境に違いないと確信したから、ナルレイシアは一所懸命、あれこれ、それこれと考えた。

……情けないことに、まだ絶対勝てそうな方法は思いつけずにいるのだけれど。

いつもより半時ばかり早く目覚めたナルレイシアは、寝台の上に正座して、眉間にしわを寄せていた。

考える。

考える。とにかく考える。

ナルレイシアはこれ以上はないというぐらい頭を振り絞って考えた——この理不尽な虜囚状態から解放されるための策を。

（最善はもちろん、わたしもリオライーシャさまもふたりとも、無事にここから脱出して、ア

マンシールさまか神殿か……ガスカールに保護してもらうことよね）

ただし、そのためには、リオライーシャとの打ち合わせが必須である。

現在、リオライーシャがどこにいるのかもわからないこの状況では無理無理だ。

（それなりに自由に出歩かせて貰っているとは言っても、屋敷内だと必ずお付きの侍女がくっついてくるし、変に興味示したらそのあたり、次の日から出入り禁止になったりするし……）

だからといって、そのあたりにリオライーシャがいるとは限らない。

そう見せかけるための偽装である可能性は高いし、あるいはそうしてナルレイシアの足を遠ざけている間に、少女を別の場所に移動させているのかもしれない。

もうひとつ考えられる可能性は、全然別の場所にリオライーシャは連れ去られてしまったのかもしれないということだ。

実のところ、その可能性は低くはない、とこの数日で、ナルレイシアは考えるようになっていた。

それというのも、ナルレイシアの異能察知アンテナとでも呼ぶべき感覚が、全然まったくこの屋敷においては働いてくれないからだ。

ナルレイシアは、斎王と呼ばれる『次期柱神候補たち』の持つ特異な能力ゆえの波動を、視覚とは別の光として認識する能力を持っている。そして、次期柱神の最有力候補と見なされて

いるオースリン侯爵令嬢ユーカリィヤの双子の妹であるリオライーシャは、その目がある限り決して見過ごしようがないほどの輝きを纏っているのだ。

……いや、実のところ、斎王に選ばれたユーカリィヤ以上に……。

その輝きが、残光ですら、見つけることが出来ない――この屋敷においては。

（リオライーシャさまは、もしかして、このお屋敷にはいらっしゃらない……？）

そうだとしたら、この広すぎる屋敷を調べるのは無駄でしかない。

自分の脱出を最優先に考えるべき、なのだけれど……。

（んー、でもなんか、この屋敷って、変なのよね……同じ道筋辿ってるのに、早く着いたり時間かかったり……お師匠さまが以前言ってた、忍び込んだ刺客を惑わすためにかけられた『迷宮幻術』みたいな……）

と、そこまで考えた時点で、ナルレイシアははっと気がついた。

「そっか！　ここってば、れっきとした王族さまのお屋敷なんだもの、そんな術のひとつやふたつ、かけられてたって、全然おかしくないんだわ！」

だとしたら……はっきり言ってお手上げだった。

感覚そのものを狂わされてしまっては、探査など不可能。

そうした術を凌駕するための方法などナルレイシアは知らないし、そのための修行なども積

んだことはなかったのだから。

「うーん」

頭を抱え込み、ナルレイシアは考えこんだ。

（リオライーシャさまの居場所も限定できないし、わたし自身も同様……？　じゃあ、あとは誰かに気づいてもらえるような狼煙を上げるしかない……って、こと？）

けれど、どうしたら、そんな狼煙を上げることができるのだろう――半ば以上「出来っこない」と思いながら、胸元に手を当てたナルレイシアははっと息をついた。

（そうだわ、これがあったんだわ！）

と――。

それこそが、彼女の最後の切り札だった。

28

男は、上機嫌に極上の美酒を飲み干した。
そこは、男の私室――勝利の確信をもたらす報告をした配下を前に、男は陶然とつぶやく。
「そうだろう……それでいい」
すべては、男の思い通りに運んでいた。
以前、下手な温情をかけたがゆえに失敗しかけたことを、男は忘れてはおらず、二度と繰り返さぬ覚悟を決めていた。
恩知らずにも、一度逃げ出した小鳥には檻を。世間知らずな小鳥には限定した自由を――ただし、そうとは気づかせぬように。
二羽の小鳥は、男にとってかけがえのないものだった。
殊に二羽目は。
「なんたる幸運か！」

男はほくそ笑む。
彼の脳裏には、すでに勝利した未来図のみが描かれていた。
有効にして絶対的価値を持つ駒――そのふたつともが彼の手の内にあるのだ。
自らの勝利を、男は信じて疑わなかった。
そう、あの日男は未来を摑み取ったのだ。

男には、物心ついたころから、普通の人間の持つものとは違う、特殊な知覚があった。
それは、目にした人物の外側を包む色彩であり、そこから放たれる熱を感知できる能力だった。
その能力が異能と呼ばれるものであることを知ったのは、男が五つになったときのこと――それまで視たこと、感じたことを、素直に口に出していた子供のために、そうした感覚を持たない母親が招いた神官から教えられた。
彼がひとの外側に見る色彩や、そこから感じる熱量は、その人物の放つ生命力であり感情なのだと教えてくれた神官は、最初に見ぬふりをすることを彼に諭した。

見えても、感じても、そうとは外に出さないように、と。

彼はなぜ、神官がそんなことを言うのかわからなかった。

『だって、役に立つ力じゃない！』

むきになって、神官に言い張ったのには理由があった。

それは、彼の屋敷を訪れた、外国からの客人の体を包む色が灰色で、しかもその幅が小さくて、触れたときひんやりと冷たく感じたことを、その本人に告げたとき、「ありがとう」と礼を言われたからだった。

その客人は、三ヶ月滞在する予定を変更してディエーンを出国、祖国に戻った。

そして祖国で息を引き取ったのだという。後日、彼の妻であるという女性から、丁寧な礼状が届いた。心から感謝する、と彼は言い残し、妻であるというその人も、同じ思いだと綴られてあった。

だから、男は自分の力を隠すべきものだとは思えなかったのだ。

けれど、神官はそれは諸刃の剣なのだと告げた。

死期や自らの感情を見抜かれて、良い気持ちのする者はいないのだと。逆に、見抜いた者を疎んじることが多いのだと。

事実、その客人の話が広まって以来、明らかに彼を避けるようになった大人が増えた。視ら

れたくないものを抱え込む者ほど、その傾向は顕著だった。

そんな矢先、男は襲われた。

偶然ぶつかり、視てしまったある貴族の差し金で、だ。

その貴族は、尋常でない悪意と憎悪を、現王家であるファラスース家に対して抱いており、その転覆を企んでいたのだ。不思議な目を持つ彼に、そのことを見抜かれたと思った貴族は、彼を亡き者とするために配下を差し向けたのだ。

幸い、傷は負ったものの、彼は命を取り留めた。ただ、浅くはない傷と衝撃のために、三日三晩高熱に苦しみ、意識を取り戻した時には、髪の色が変わっていた。

同時に、彼の不思議な力も失われていた。

異能ゆえに彼が襲われたことを知っていた両親は、逆にそのことに安堵した。襲われたときの記憶をも失っていた彼は、それからずっと、普通に暮らす日々を手に入れたのだ。

末席に近いとはいえ、王家に連なる彼にとって、そうした日常は穏やかで過ごしやすいものだった——時折胸に、得体の知れない疼きが走る以外には。

かきむしらずにはいられないほどに、苛立たしくも狂おしい、胸の奥底で生じる疼き……脈動、衝動。

数年後、彼は夢のなかで、その正体を知った。

自分を狙った男が口にした、罵りの言葉を――。
『貴様など……！　……のくせに！』
それは抜けない棘となって、彼の心に突き刺さった。
そうして、毒はじわりじわりと、彼の心に染みこみ始めたのである……。

「……庭の散策？」
家宰からの報告に、男は微かに眉宇をひそめた。
「あの小娘が、それを望んでいると？」
屋敷の奥――結界術師の手によって、気配ひとつ漏れ出ぬように仕上げられた一室で、男は家宰の言葉に耳を傾けていた。
「は」
言葉少なに答える家宰に、苛立たしげな一瞥を投げて、男はぼやいた。
「狙われている自覚があるくせに、外に出たがるとは……その娘、本当に選定者なのか？」
「神殿から回ってきた情報の特徴は、完全にあてはまりますが……」

家宰の口調が歯切れが悪いのは、実物を目にして、はっきりそうだと断言したのが、目の前の主であったからに他ならない。

そのあたりのことに気づいた男は、決まり悪げにごほん、と咳をひとつついた。

「ああ、そうだったな。異例に若い選定者である上に、若い娘が好奇心に弱いことを失念していた。文献に残る選定者は、ことごとく人生経験も知識も積んだ賢者ばかりだからな。勝手が違うのはわかっていたはずなんだが……なんとも、扱いづらいな」

だが、そういう世間知らずな小娘だからこそ、こちらが利用できることも確かだった。

「娘は、まだ自分の置かれた状況に気づいてはいないのだな？」

尋ねた男に、家宰ははっきりとうなずいた。

「それは間違いないかと。名前を名乗りながら、連絡すべき住所を口にしないというのも、身の危険を感じてのことと思われますし……神殿からの情報とも一致するかと思いますが」

「そうだな」

と、男はうなずいた。

斎王院は、現王家ファラスース家を王家たらしめた柱神アマンシールの領域である。俗世の権力は立ち入ることはできないが、そこに引き取られている斎王たちの親族や、神殿に籍を持つ者たちは別だ。

彼らなら、斎王院に踏みいることも、情報を収集することも可能なのだ。

そして、異例の若さとはいえ、歴とした次代柱神の選定者として選ばれたあの小娘が、身の危険をそこで感じているのだとすれば、だ。

「どこぞの馬鹿が、先走っている可能性は高いな」

小娘と侮り、甘い言葉で籠絡しようと思ったところが、意外に頑固なその性格に苛立って、脅し文句のひとつも口にした者がいたとしてもおかしくはない。

いや、口先だけではなく、なにがしかの行動に出た者もいたかもしれない。

とはいえ、それはこちらにとっては都合のいいことだった。あの娘が素直に自らの身分を打ち明けていたら、こちらとしては、斎王院に送り届けるしかなかったのだから。

「どこの誰かは知らんが、馬鹿さまさまだな」

つぶやき、男は微かに目を伏せた。

「それで、娘はこの屋敷の主人については知りたがらなかったのか？」

名も知れぬ相手に保護されて、それに疑問を覚えないというのは、また別の意味でおかしなこととなる。

「……それにつきましては、何度も尋ねられました。なにもかも隠しては、かえって不審を招くと思い、ここがウーディリア伯爵邸であることはお伝えいたしました」

それは、まぎれもない真実である。

男は家宰の判断に満足してうなずいた。

「なら、娘が不安がって、あれこれ動き回る心配はいらないな。散策したいというのも、安堵ゆえのことなのだろうしな……」

ウーディリア伯爵家は、ディエーンにおける名門貴族で、広く市井にもその名が知られている。

何代か前の当主である伯爵が、慈善事業に精を出したのがその理由だ。おかげでディエーンにおいて、ウーディリアの名は非常に覚えがめでたい。

「よかろう。あまりに締め付けて、妙な疑いでも抱かれては困ることだし、そのくらいの自由は認めてやろうよ。ただし……くれぐれも――わかっているだろうな？」

念を押した男に、家宰は深々と頭を下げることで答えに代えた。

男は、配下のその様子に満足し、うなずき、息をついた。

と、そこでひとつ気づいたように家宰に問いかけた。

「そうだ。勝手に文など書いて誰かに託してなどおらぬだろうな？」

爵位を持たぬ家柄の子女でも、裕福なそれに育った者は、文字の読み書きに通じていることは珍しくない。

内密に調べたところ、件の娘は地方とは言え富商の出で、ある程度の教育を受けている可能性が高かった。もし、こちらの目を盗んで、外に連絡されようものなら、都合の悪いことになりかねない。

だが、男のもっともな疑問に、家宰はなぜか笑いを堪えたような顔で「そのご心配は不要かと……」と答えた。

理由を尋ねた男の前に、差し出されたのは、薄手の上質の紙に書かれた——ミミズが這った跡のようにしかみえない……はっきり言って、悪筆を通り越して判読不明な暗号としか思えない代物だったのだ。

「なんだ、これは？」

尋ねた男に、家宰は「ヴィル・ダカールのお跡にございます」と答える。

「フィレアはそもそも女性に対して、学問に熱心とは言い難い土地柄だと聞いております。彼女の父親も同様で、どうやら読むことに関しては独学まじりでなんとかなったようですが、書くほうは滅法不自由なままか、と」

そのことを自覚してるらしく、筆に手をのばそうともしません。

ある意味、それは哀れなことだったが、紙面に描かれた、ミミズののたうつような代物の羅列は、男にとって笑いの種以外の何物でもなかった。

思わず、ぶっ、と吹き出した。

「こ、これは……確かに、誰にも読めぬな。恥じ入る気持ちもわかるというもの……神々も、なにを考えてこのような娘に、かくも重き務めを課されたのやら……とはいえ、かの娘が我にとって重要な役目を担っていることは事実。幸運に感謝し、わたしはこの道を歩ませてもらうとしよう」

そう言い、男は目を光らせた。

必要な駒は揃った。

後はそれらをうまく利用するだけだ。

そうして――この手に未来を。

摑むための用意は、出来たのだ――。

「本当に!?　よろしいのですか!?　ありがとうございます！」

心からの感謝をこめて、ナルレイシアは庭の散策を許してくれた、この屋敷の家宰である男性に礼を述べた。

男は柔和な笑みをたたえ、「大げさですよ」と言った後、こう続けた。

「ただ……こちらで調べさせていただいたところ、ヴィル・ダカール、貴女は狙われている可能性がある……そうですね？　本来のお住まいにお戻りになられたくないと思われるのも、そのせいかと推察いたします。そうであるならば、こちらとしても用心せねばなりません。お邪魔はいたしませんが、そばで見守る者が存在することは、是非看過していただきたいのです」

それは、見張る者がいることを認めよ――ということだった。

もっとも、すでに籠の鳥状態にある自分が、完全な自由など得られるはずがないとは思っていたから落胆したわけではなかったのだけれど。

「守って、下さるのですね……ありがとうございます」

丁寧に頭を下げて、ナルレイシアは男に礼を述べた。

「正直なところ、外に出るのは怖いのです。でも、外に出なければ息が詰まってしまいそう……もうご存じかとは思いますが、わたくしは王宮の更に奥の斎王院にて務めを果たさねばならぬ身であります。あの宮に集われる方々の資質を見極めることこそが、わたくしに課せられた使命でありましたものを……わたくしは、わたくしの身の安全を揺るがす言葉に心を揺るがせ、恐れを抱いてしまいました」

本音四分の一――成り行きこれまた四分の一、やる気は実に半分である。

囚われの身でありながら、ナルレイシアは闘志充分だった。
その分演技には身が入っていた。
怯えながらも、懸命に使命を全うする健気な娘としてのそれに。
実際のところは――。
（ちぇー、見張り付きかぁ。じゃあ、なんとか見張りの目を盗める場所、見つけなくちゃなんないなー）
とか、考えていたにしろ、だ。
ここが、ロスタロイドにおけるウーディリア伯爵邸だと聞かされた瞬間、ナルレイシアのなかで情報は一本化されたのだ。
ファラスース王朝が成立して数十年経った頃、ウーディリア伯爵はまだ国内に残る荒廃に心を痛めて、私財を擲ち、その救済に走ったのだ。
幸いにも、伯爵にはそれだけの投資をしても揺るがぬだけの財と力があり、その後二代に至って、慈善事業に勤んだ。
しかし、次後継者にはそれだけの才がなく、伯爵家は四代目を迎える前に破産したのだ。
破滅した爵位は、結局王家に返ることになる。
そして、いま、ウーディリア家の爵位を保持しているのは――王家に連なるある一族、なの

だ。

ナルレイシアは……不本意ながら、それがどこかを知っていた。

馴染みの店――『踊る赤馬亭』で、目にした王族の肖像画によって。

ウーディリア伯爵家が破産した後、その名声を惜しんだ王家が、新たにその名を与えた……その家は。

ナサリエル公爵家――借財のせいで、領地も財も失った伯爵家は、名誉ある家名のみ、王家の親族たる一族に委ねられたのである。

それは、一般には知られていない事実。

だが、幸か不幸か、ナルレイシアはそのことを知っていた。

だから、彼女は読み取ったのだ。

ナサリエル公爵そのひとこそが、リオライーシャを欲し、自分まで利用し、王権を私しようとしているのだと。

それは事実上の反逆だ――だからこそ、彼は自分の前に姿を現そうとはしないのだ――いまはまだ。そして、だからこそ、自分が彼の正体に気づいていることは知られてはならない。

（わたしなんて、はっきり言って思いがけなく飛びこんできたおまけみたいなものだものね。ばれたらきっと口を封じられちゃうわ）

くれぐれも慎重に動かなければならない。
そして――。
（一刻も早く、外部と連絡を取らないと……）
この国の未来まで変わりかねない。
なすべきことを心に決め、ナルレイシアはそっと目を伏せた。

29

朝のさわやかな風が、ナルレイシアの金の髪を揺らす。
（うーん、いい風）
目を細めながら、彼女は庭の様子を眺めやった。
（女優よ、わたしは女優）
もはやすっかり口癖（？）となってしまった『呪文』を胸中でつぶやきながら、彼女はちらりと塀の方向を見つめた。
生け垣の向こうにそびえるのは、見るからに頑丈そうな石造りのそれだ。道具なしにはよじ登ることも出来そうにない高さである。
（そばの木……も、細くて登れそうにない、か。まあ、こんなひらひらしたの着て、おまけに人目があるのに木登りなんて所詮無理だけど）
やはり、あの方法しかない、と彼女は思った。

そっと、胸元を押さえる。

そこには、彼女が選定者であることを証す特別な神聖硬貨があった。

通常の神聖硬貨には、虹神七神の横顔が刻まれている。ところが、ナルレイシアが持つそれは、虹神の正面の顔が刻まれているのだ。

そのことの持つ重要性を、多くの者は知らない。ナルレイシア自身、血相を変えたスカルトードに、神殿に連れて行かれるまで、全くなにも知らなかったのだ。

（珍しい記念硬貨かなにかだと思ったものねえ……でも、珍しいのは本当だから、きっと人目を引くはずだわ）

計画は、こうだ。

なんとか見張りの目を盗んで、問題の神聖硬貨を屋敷の外に放り投げる。

普通の硬貨なら、拾った者がそのまま着服してお仕舞いとなるかもしれないが、ものはお守りとしても重宝される神聖硬貨だ。しかも大変珍しい、正面顔が刻まれたもの――拾った人間が、信心深く、神殿に持ち込んでくれるのが一番望ましいわけだが、そうでなくても、稀少なものには人の耳目が集まるものだ。

ちょっとした噂にでもなってくれればいい。

（そうしたら、きっとスカーさんかガスカールが気づいてくれるはず……）

その硬貨がどの屋敷の近くで見つかったのかさえ判明すれば、彼らはすぐに動いてくれるだろう——下手に逃げ出すより、ずっと勝算は高いはずだ。

（リオライーシャさまがどこにいらっしゃるのか、わからないままなのが、ちょっと残念だけど、警戒されて身動きが取れなくなるよりはましだものね）

自分にそう言い聞かせ、彼女は庭の景色を楽しむ風を装って、歩き回った。

あまり塀に近づきすぎても不審を買うだろうし、かといってある程度は近づかないと塀の向こうに硬貨を届けられない。

（大きく振りかぶるわけにもいかないし……あー、視線を感じる。なんとか見張りの気を逸らさないと……）

と、思ったそのときのことだった。

近くの茂みから、がさりと、何かをかき分けるような音が聞こえた。

おまけに、その奥から、きらりとなにかが光ったのだ！

突然のことだったので、ナルレイシアは本気で驚いた。

「な、なに!?　誰!?」

声がひっくり返っていた。

「どうなさいました！」

少し距離をおいて、彼女を見張っていたとおぼしき男が駆けつけてくる。
「そ、そこの……茂みから……なにか」
あの光は見えなくなっていたが、指さす手が震えてしまった。
とはいえ、少しは冷静さを取り戻したナルレイシアは、
（もしかして、犬か猫だったのかしら……？　侵入者対策に、庭に犬を放ってる家ってよくあるって聞くし……だとすると、やっぱりひとりでこっそり庭に出るってのは無理っぽいわね。あ、でも今って絶好の機会じゃない！）
見張りの男の関心は、完全に茂みに向いている。
しかも、おあつらえむきに、再び茂みから音が聞こえたのだ。
（よーし、今よ！　今しかないわ！）
ナルレイシアはそっと塀の方を振り返り、懐から神聖硬貨を取り出した。
塀までは多少距離はあるが……幸い、肩には自信がある。男がしゃがみこみ、茂みを覗きこんでいるのを確認してから、彼女は硬貨を放り投げた――。
光を反射することなく、硬貨は放物線を描いて塀の方向へと飛んでいく。
（大丈夫。塀は越えるわ）
これでひとまずは安心、とナルレイシアが内心安堵の息をついたその瞬間！

彼女は、信じられない光景を目にすることとなった。
弧を描いて屋敷の外に飛んでいくはずだった硬貨が、空中でなにかにぶつかったかのように、塀の内側に落ちてきたのだ。
（なに!?　なにが起こったの!?　まさか塀の上にガラスが張ってあるわけ!?　って、そんなのあり得ないでしょう！）
自分の目にしたものが、どうにも信じられず、思わず目を瞠った彼女の耳に、苦笑まじりの声が飛び込んできたのは、その次の刹那のことだった。
「……困るんだよねえ、そういう妙な真似されるとさあ」
声のした方を振り返ると、黒髪に象牙の肌の、二十代半ばとおぼしき男が立っていた。襟の高い、東方風の衣装を身につけたその男は、懐から白いなにかを取り出すと、宙に放った。その途端、その白いなにかは小さな鳥に変化し、塀の下に落ちた硬貨をくわえて、男のもとに戻ったのだ。
「ま……魔術師……!?」
声が、震えた。
斎王院の四季総揃いの庭や、魔法屋敷と呼ばれるファティ・リンシャの館のおかげで、不思議なことには免疫のあるナルレイシアだったが、それでも魔術師などという存在を目の当たり

にするのは初めてのことで、冷静ではいられなかった。
なにより――。
(見られた……わたしがしようとしていたこと、ばれてしまった……！)
そのことが、なによりも恐ろしかった。
そんな彼女の様子を、興味深げに見つめていた男は、にやりと笑った。
「魔術師、じゃあない。まあ、あんたにとっては、おれは悪い魔法使いだろうがね」
そう言って、男はゆっくりと近づいてきた。
指先が冷たくなるのを、ナルレイシアは感じた――。

「ここ数日、妙な気配がすると思ってたら、こいつのせいか。また、面白いもの持ってるお嬢さんをお招きしたもんだね」
旧ウーディリア伯爵邸――今ではナサリエル公爵家の別邸となった屋敷の奥まった一室――。
東方風の衣装を身に纏った青年――リーイン・ル・ファンは、ナルレイシアから取り上げた

神聖硬貨を指で弾いた。

青年の前にいるのは、雇用主であるこの屋敷の主人だ。

「よこせ。それにしても、あの娘……どこにこんなものを隠し持っていたのか……」

青年が、くすくすと笑った。

「若いお嬢さんのことだからな、ちょっとした工夫で、あれこれ隠し場所には事欠かないんだろうよ。ま、紳士が相手でなきゃ通用しないかもしれないがね」

「身元のわかるような物はいっさい所持していなかったと聞いたが……こんなことなら、女たちに命じて、調べさせておくべきだったな。だが、まあいい。お前には礼を言う。こんなものが、この屋敷の近くで見つかったとなれば、神官たちが押し寄せてくるところだった」

忌々しげにつぶやくと、男は神聖硬貨に手を伸ばした。

だが、その指が触れる寸前、ふと思いついたようにリーインを振り返った。

「妙な気配と言ったな？　この硬貨には、やはりなにか特別な力が宿っているのか？」

「ああ、たっぷりとな。ほんと、おれがこっち出身の結界術師じゃなくてよかったな。こっち仕様の結界だったら、そいつは通り抜けちまってたはずだぜ？」

不敵な笑みをたたえたまま、リーインは可笑しそうに硬貨を差し出した。

「どうした？　別に触ったからって、雷に打たれるようなことにはならないぜ……多分、だが

な」

揶揄も露わな口調に、ナサリエル公爵フィディエールは眉宇をひそめた。

「東方では、雇い主に相応の敬意を払う習慣もないのか？」

「信頼できる相手なら、相応以上に払うとも。だが、こんな厄介そうなもの、勝手に屋敷に持ち込んどいて、そのことを一言も言わないってのがなあ」

「わたしが持ち込んだわけではない！　そもそもあの娘まで連れてくるはずでは――」

なかった、と言いかけたフィディエールに、リーインは肩をすくめて見せた。

「部下の失敗は上司の責任でしょー？　第一、もうひとりのお客さんのほうからも、ちょっと奇妙な感じ、受けるんだよねー。一体何者なのかぐらいは教えてもらいたいかな、と」

フィディエールの顔が、ぎくりと強ばった。

「……お前はあれこれ詮索しない、有能な結界術師だと聞いていたのだがな」

苛立ちも露わにそう言ったものの、青年の厳しい視線に落ち着かないものを感じたのか、フィディエールは慌てたように言を継いだ。

「隠すつもりはなかったのだ。あれに特別な力があるなどとは、わたしも知らなかったのだしな。ただ、異能を多く輩出する家の娘であることは……言っておくべきだったかもしれん」

フィディエールの譲歩に、しかしリーインは心動かされた様子もなくうなずいた。

「そうだね。そういうことは、早く言って欲しかったかな。術によっては、こっちの系統の力と反発しあって、被害が出ることだって考えられるしね」

その言葉に、フィディエールは顔を青くした。

「さ、騒ぎは困る！」

後ろ暗いなにかを抱え込んでいると、言ったも同然な反応に、青年は薄く笑った。

「そうだろうね。おれもそれは同感。で、こいつはどうする？　やっぱりあんたが持っとくかい？　あのお嬢さんをおとなしくさせとくための質ぐらいにはなりそうだけど」

これに対して、フィディエールはかぶりを振った。

「いや、その必要はない。……だが、そうだな。それの保管はお前に任せよう。間違っても、それの気配で、ここが知れることのないように、厳重に封じてくれ。なにか必要なものがあるなら、すぐに手配させよう」

言うべきことは言ったとばかりに、フィディエールは答えも待たずに立ち上がった。

リーインもまた、そんな彼を引き留めようとはしなかった――。

「なんだかねえ」

長椅子に行儀悪く寝そべった格好で、リーインは神聖硬貨を玩んでいた。

「金払いのいい野心家の貴族ってことで、仕事を引き受けはしたものの……信頼関係築けなさそうなとこ、ちょっと問題かなー」

結界術師を名乗る通り、彼は結界にまつわる仕事を生業としている。

病避けや泥棒防止といった――比較的――一般的なものから、曰くのある品の封印、呪術そのものの封じ、あるいは解放などと、仕事の種類はさまざまだ。しかし、ありがちなことだが、大きな声で言えない仕事のほうが実入りがいい。

今回の仕事も、そうだった。

ナサリエル公爵フィディエールは、見る者が見れば一目でそうとわかる野心家だった。財産家である上に、育ちがよいのか支払いでもめたことはないという情報もあって、契約を結んだのだ。

依頼の内容も、厳重すぎることを除けば、いくらでも耳にするような結界の構築――侵入も脱出もかなわぬように……など、耳にタコが大量発生状態だから、気にとめもしなかった。

どうせ、野心の鍵となる人なり物を抱え込むつもりに違いないからだ。

結界構築後も、滞在を求められたとき、どうやら的は『生きて動く』らしいと見当はついた

が、それもありがちなことなので「はいはい」とうなずいておいた。

支障とまではいかないが、落ち着かない気分を味わうようになったのは、数日前から、だ。即座に逃げ出す必要性を感じるほどのものではなかったが、明らかに奇妙な力と気配を、この屋敷に感じるようになった——それも、ふたつもだ。

今日の朝の出来事のおかげで、その正体のひとつは知れたわけだが。

「予想以上の野心家だったか……それとも、自分の身の丈もわからない『馬鹿様』なのか。神罰怖がるぐらいなら、関係者に手ぇ出すんじゃないよって、誰も言ってくれなかったのかねー。類が友を集めちゃって、そういうこともわからん連中にしか囲まれてないのかねー」

だったら、ちょっと可哀想かも、と全然思ってもいない顔でリーインは笑った。

そうして、少し思案する。

（『虎穴に入らずんば虎児を得ず』でいくか、『君子危うきに近寄らず』でいくか……）

微妙なところだった。

ナルレイシアが持っていた神聖硬貨には、確かに神威が宿ってはいるが、公爵が恐れているほどの威力はない。

あの公爵が、よほどの間違いでもしでかさない限り、冒す価値のある危険程度におさまる範囲のものだ。

しばらく考えた後、リーインは一度匙を投げることにした。
今日考えてわからないことは、明日考えてみればいい――とまあ、つまり。
成り行きにまかせたわけである。

30

次代柱神を見極める役目を負う選定者である少女の護衛を、当代柱神アマンシールから直々に頼まれた青年――エルスカーネ公爵ガスカールは、非常な焦燥を覚えていた。

それというのも、少女ナルレイシアの姿が消えてから、すでに十日近くが経過したというのに、いまだにその消息が知れないからだった。

友人であるスカルトードの人脈を頼りに、彼女が行方不明になった直後の状況を知ることはできたのだが、あいにくそれは決定的な手がかりとはならなかったのだ。

誘拐まがいの方法を使って、ナルレイシアを強引に招待したのは、ディエーンの第一王子であるウォルカードだった。次期柱神候補として、斎王院で暮らす初恋の少女の様子を聞き出すためだったと聞いたときには、ガスカールは目眩さえ覚えたものだ。

柱神の交代劇には、さまざまな複雑な問題が絡み合うため、内密にことを運ぶ必要があったことは認めるが、せめて一言自分に断りを入れておいてくれたなら、と思わずにはいられなか

った。

なにしろ、ナルレイシアはその招待からの帰途、本当に行方知れずになってしまったのだから！

選定者である彼女の身柄を狙う者は少なくはない。

斎王の家族や親族はもちろん、現王家の存続を願う者たちにとっても、彼女の存在は重要な意味を持つ。

自分たちの望む候補を、次期柱神に選ばせようと、彼らはことあるごとに——土産と称した賄賂を両手いっぱいに持って——彼女を訪れ、熱心に頼みこんでいた。それが無理ならせめて、誰が次代柱神なのかを教えてほしい、と——神罰なにほどのものぞといった様子で、かき口説いていたものだ。

しかしナルレイシアは、賄賂などに心動かされるような娘ではなかった。

無類の本好きという弱点を突かれたときですら——心は揺らいだに違いないが——己が正義を貫き通した。

神罰に対する恐れもあったのだろうが、あれは彼女自身の性格だろうとガスカールは思っている。

しかし、彼女が一向に靡く様子を見せないものだから、最近では焦れた一団が、脅しめいた

ことを口にするようになったことも知っている。

そんな矢先のことなのだ――彼らが、この件に拘わっている可能性は限りなく高く……しかも、疑わしき人間の数はあまりにも多かった。

動機のある人物全員を調べる時間はなかった。

もしもナルレイシアがあくまで自らの正義を貫こうとしたならば、業を煮やした誘拐者が、どんな道を選ぶか、ガスカールにはわかっていたからだ。

かつての当事者のひとりであるアマンシールから、聞かされた話だった。

二世紀以上も昔――当時ファラスース侯爵家の三男に過ぎなかったアマンシールを、次期柱神の本命だと見極めた選定者は、それをよく思わぬ勢力によって暗殺されたのだと。

選定者という呼び名が誤解を招くのだろうね、とファティ・リンシャとともに、幼くして両親を亡くしたガスカールを育ててくれた、やさしい現人神は言っていた。

選定者とは、次代の柱神を選ぶのではない。柱神の証でもある神宝が、自ら半身にと選んだ存在を見極める役目を負わされただけの人間であるのだ。

世界の天と地との間――空を支える御柱たる柱神が百八人いた頃は、選定者などいなかったのだという話もアマンシールから教えて貰った。天寿を全うした柱神が遺した神宝は、数年から数十年の眠りを経た後、自らの半身を求めて勝手に動き回ったり、逆に相手を自分の元に呼

び寄せたりしていたのだという。

ガスカールの知る神宝といえば、アマンシールの指にある『貴神の午睡』という銘を持つ指輪と、今回選ばれる柱神の半身である——やはり指輪の——『黄昏の黄金』だけだから、そんな指輪がひょいひょいとあちこち空間移動するというのは、それだけで目眩を覚える話なのだが、かけがえのない存在であるふたりが、それを事実として話すのであれば、それは事実に違いないだろうとは思うのだ——正直、見たくはないが。

けれど、人の欲望が神意を大きく裏切った暗黒時代、人々の我欲が神宝を歪め、結果的にその半数近くを『壊して』しまった。

神宝としての力をかろうじて失わなかった品々も、よほどのことがなければ、自ら半身の元へ赴くこともできぬほど、弱体化してしまった。

正当な半身を得ることがかなわなければ、神宝は喪われるばかり——それを憂い、虹神七神は、選定者という存在を作ったのだという。

ただ、見極める者として。

けれど、人はたやすく過去の己が罪を忘れる。

自らにとって都合の良いことしか覚えていようとはしない。

結果として、最も清廉であらねばならない選定者は、最も大きな誘惑と、最も大きな脅威に

晒されることとなったのだ。

ナルレイシアは誘惑を退けた。

次に彼女を襲うのは――？

穿ちすぎな危惧だとは、ガスカールには思えなかった。

即座に動くべきだと思った。

にもかかわらず――迷った。

彼は、自身が先の王家であるエルスース家の直系の血を受け継いだ身であることを知っていたからだ。体に流れる血の濃さから言えば、現王家ファラスース家縁のそれの方が多い。だが、先の柱神交代劇の際、エルスース家の血のほとんどは粛清されたのだ。

例外は、王の親友であった侯爵――その次代だったという説もあるが――が、エルスースの生き残りである美姫と恋仲となり、命をかけて王に許しを請うた結果、その真心ゆえに許されたという、おとぎ話としか思えないような話だけだ。

あり得ないだろう、そんな話――と、ガスカールは長いこと信じていた。アマンシールが『ああ、あのときのことはよく覚えてるよ。兄上も頑固で、説得するのは結構骨が折れたんだよ』と、なんでもないことのようにぺろりと言ってくれるまでは。

黒髪に紫の瞳は、エルスース家の特徴。

けれど、ディエーンにおいて爵位を持つ家は、遡れば祖はひとつ。

だから、偶然、その一つの家の特徴が――滅んだ前王家というのが、なにといえばなにだが――自分に顕れただけなのだと信じたかったというのに。

最も信頼し、愛するひとから、一番嬉しくない真実を打ち明けられた。あの時の衝撃は、とても言葉では言い表せない。

今でこそ、アマンシールがなぜ、真っ正直に答えてくれたのか、わかるけれど。

アマンシールはきっと、こう伝えたかったのだ。

自らを形作ってくれた人々の全てに感謝しなさいと。そこには負の意味も、正の意味もあるだろう。すべてを内包して、感謝することを忘れないで欲しいのだ――と。

わかるのだが、それでも躊躇いは捨てきれなかった。

かつて、ふたつの勢力に目をつけられ、結果として両親を失うこととなった過去を持つからこそ。

現王家に不満を抱く貴族たちは、先の王家の直系の血を受け継ぎ、またその特徴を色濃く受け継いだガスカールを、御輿として担ぎ上げようと画策した。一方、そのことに不安を抱いたファラスース家に忠実な貴族たちは、同じ理由で彼を排斥しようとした。

そんな両者の争いのなかで、ガスカールは親しいひとたちのほとんどを失った。

アマンシールやファティ・リンシャがいたから、心まで死ぬことはなかったが、また同じような思いを味わうのはご免だった。

そう――それこそが、彼が迷った理由だった。

ナルレイシアに深く関わることは、再び同じような者たちを身近に引き寄せてしまうことを意味しているとわかっていたから……どうしても、一歩を踏み出すことができなかった。

だが、もう……いつまでも、立ち止まってはいられないことも――今のガスカールにはわかっていた。

ナルレイシアが、攫われた先でも、己を曲げないとなれば、誘拐した者たちはさっさと見切りをつけるに違いないのだから。彼女の存在を消すことで、新たな選定者の出現を待つまでの時間を稼ごうと思うのは、ごく自然な成り行きだ。

そうして生じた僅かな時間の間に、斎王たち本人とは関係のない思惑が働き、結果的に殺しあいが始まってしまうかもしれない。

そんなことは、断じて認められなかった。

だから、ガスカールはそれまで見ないふりを通してきた事実に正面から向き合うことを選んだのだ――母とも祖母とも慕う、老婦人の元を訪れることによって。

ディエーン王都ロスタロイドにあって、知らぬ者はないとまで言われる、魔法屋敷を訪れたガスカールは、屋敷の女主である女性に懇願した。

「お願いします、ファティ・リンシャ。もう、あなたにお縋りするしかないのです……あの山ざ……もとい、こむす……いえ、あの娘の行方を、あなたの力で以て捜していただきたいのです。あなたの……代替わりを果たされたとは言え、いまでもお持ちになっておられるであろう柱神としてのお力で……！」

頭を下げ、堅く目を閉じながら、ガスカールは元凶となった少女を、内心あらん限りの言葉で罵ってやりたい、と思っていた。

両親を亡くし、複雑な立場にあった幼い彼に、最初にやさしい手を差し伸べてくれたのは、この国の守護神であるアマンシールだった。

彼の庇護を受けることで、命の危険からは免れたガスカールにとって、アマンシールは確かにかけがえのない大切な存在となった。だが、成長するにつれ、そのひとは、自分にとってだけの大切なひとではないことに気づかされた。

アマンシールは、ディエーンに住むすべての人間に必要とされる『神』だったのだ。自分ひ

とりの些細なわがままに、つきあわせていいひとではない。そのことに気づいて以来、距離を測り始めたことに気づいたのだろう――ある日、アマンシールはファティ・リンシャに引き合わせてくれた。

『以前、親しくしていただいていた方縁のご婦人でね。きみのことを話したら、是非会いたいとおっしゃるものだから、この場を用意したのだよ』

そう言われ、紹介されたのは、母や叔母というには年を経、しかし祖母というには若々しい、年配と呼ぶべきか初老と呼ぶべきか、判断に迷う……けれど、とても美しい女性だった。つややかな銀の髪を、ゆったりと上品に結い上げ、冷たく思えてもおかしくない灰青色の双眸を、笑みで細めて自分を見つめてくれたそのひとを、ガスカールは一目で好きになった。

なにより、異国のひとであることが、一番の救いだったのかもしれない。

ディエーンにいる限り、異端の先祖返りという噂から逃れられずにいたガスカールにとって、そんな事情など関係なく接してくれる彼女の存在は大きかったのだ。

会う度に好きになって、その内アマンシールの許しをもらって、ロスタロイド市街にある彼女の屋敷を訪れるようになって、いつの間にか、暮らしているといってもいいぐらいの時間を過ごすようになっていた。

彼女の屋敷が不思議館だとか、魔法屋敷と呼ばれていることを知っても、ガスカールは不審

には思わなかった。彼女が隣国の柱神の縁者であることを、前もってアマンシールから聞かされていたからだ。

神の縁者なら、多少の不思議は当たり前だと、単純に思いこんでいた——そのころは。

それが揺らぎ始めたのがいつのことか、ガスカールにははっきりとは思い出せない。

あるいは、彼の持つ異能をかぎ分ける能力が、そのことを告げていたのかもしれない——ファティ・リンシャもまた、当たり前の人間の女性ではないのだと。

そう感じて以来、気をつけてみるようになると、色々と気づかされることは多かった。

転んで出来たはずの傷が、翌日には消えてなくなっていたこと。以前見つけた爪の傷が、いつまでたっても消えないこと。たまに掃除などしてみると、自分の髪の毛が落ちていることはあっても、彼女のそれが落ちていた例がなかったこと……などなど。

決定的な出来事を、彼が目撃したのは十三歳の時。

その日、ガスカールは久しぶりに王宮を訪れ——もちろん、貴族としての義務を果たしただけである——そこで、さんざんに言葉の暴力を浴びせかけられた。負けず嫌いな彼ですら、少々落ち込む程度には、その日の『口撃』は凄かった。

苛立ちと、やるせない怒りを胸に、ガスカールはファティ・リンシャの屋敷を訪れた。精霊たちが、人間の猛ぶる感情の激しさを苦手としていることを知らなかったからのことだった。

精霊たちの慰撫にも拘わらず、感情が激しつづけていた彼を、屋敷そのものが異物と認めた線はあり得ないことではない。

そのせいかどうかはわからないが、彼は階段で、なにかに足を取られた。

（あ、落ちる……？）

どこか他人事のように、階段を転げ落ちていく自分のことを、客観的に見つめていたつもりのガスカールは、しかし次の瞬間、はっとした。

「なにをやっているの!?」

そう叫んで、誰かが落ちる彼の身体を受け止めてくれたからだ。

その瞬間、視界いっぱいに広がった銀色の髪ほど、美しいものはない――と思った。

あの髪を持つ人ほど、美しいひとはいないのだと。

階段から転げ落ちた自分を、ファティ・リンシャは身を張って受け止めてくれた。

両肩の脱臼と引き替えに。

あの日ほど、悔やんだことはない。自分はなにをしていたのかと。大事なひとを巻き添えにして傷つけるほどのなにが、自分にあったのかと。

悔やんで、落ち込んで――ぺったんこになった夜中。

ガスカールは魔法屋敷の本当の奇跡を見た。

それは、夢さながらの美しい……美しすぎる光景。
蛍の光のような、おぼろげで優しい光の群れに包まれて、ファティ・リンシャが――立っていた。
自分を助けたがために脱臼した両腕は動かず、だらん、と垂らしたまま、美しい老婦人は蛍の大群に包まれたように、その光の中に佇んでいた。
彼女は、穏やかに微笑んだ。
光が、それに答えるように輝きを増した。
現実に目にしたのはそれだけだ。
けれど、翌日――脱臼したはずのファティ・リンシャが、なんの不自由もなく腕を使うのを見て……しかも、そんな彼女の周囲に、蛍のような光を見いだしてしまっては――もう、認めるしかなかった。
ファティ・リンシャもまた、アマンシールの同朋なのだと。
……それでも、それを公にするかしないかは別の問題だった。

慈悲深き聖女――豊かなる母にして、汚れなき癒しの光を持つ者――。
ガスカールにとって、ファティ・リンシャはまさにそのものと言える存在だった。
永遠に続く絆だとさえ感じていた。
けれど、あの日。ナルレイシアの行方が知れなくなった日。
ガスカールのなかで、嵐が生まれた。
その嵐が、彼を巣立たせた。
未だ、本人にその自覚はなく、それこそが最大の問題と言えなくもないわけだけれど――。

31

「ナーシアが……行方不明？」

よほど思いがけないことだったのか、話を聞いたファティ・リンシャは、考えこむようにうつむいた。

「斎王院にいて、攫われることがあるとは思えないから……襲われたのは、出先でかしら？　あなたは一緒ではなかったの？」

老婦人の声に、咎める響きはなかったが、却ってそれが心に突き刺さった。

「あの日は、どうしても手の放せない用事があって、行けないと手紙を届けさせていたんです……それを、ウォルカードが利用して」

ユーカリィヤのことを知りたがっていた第一王子は、途中でまんまと手紙をすりかえさせたのだ――彼女を『招待』しやすいように！

彼がそんなことをしなければ、ナルレイシアはさすがにひとりでは街に出掛けなかったろう

し、そうであれば、攫われることもなかったのだ。
全ての元凶はウォルカードだと言っても過言ではない。
が、彼女の行方不明を知った少年が、紙のような顔色になったのを目にしたガスカールは、さすがにそれ以上相手を責めるような言葉を口にすることはできなかった。もちろん、無事にナルレイシアが戻ってきたら、改めて灸を据えるつもりではあったが。
そのあたりの事情を、かいつまんで説明すると、ファティ・リンシャはふう、と息をついた。
「……そう、ウォル坊やが。選定者の抱える事情を、あらかじめ教えておけば、そのような真似はしなかったでしょうに……」
確かにそうかもしれないが、いまさら言っても詮ないことだった。
「それにしても、あなたもナーシアも、ここ最近、よく街に出ているようだけれど、何か理由があるのかしら？　斎王院の蔵書は、質も量も充実しているから、あの子が退屈するとは思えないのだけれど？」
「なぜ、それを……」
と、尋ねかけて、それが愚問であることに気づく。
柱神はあらゆる精霊に愛された者だ。そのひとりであるファティ・リンシャが、気づかぬは

ずがないではないか——彼女の同居人と養い児であるふたりが、揃って街を徘徊していることを、精霊たちがご注進しないわけがないのだから。

「斎王さまのおひとりから、頼まれたことがありまして……」

少し、悩む——果たして、その内容まで打ち明けていいものかどうか。

だが、なにが手がかりになるかもしれない状況で、秘するのが得策とも思えなかった。スカルトードやランディータも頑張って調べてくれてはいるが、本当に攫われた後のナルレイシアの足取りは、いまだ摑めてはいないのだから。

「生き別れの双子の妹御を捜してほしい、という話でした。なんでも以前から夢で互いの存在は感じあえていたそうなのですが、その夢のなかで、妹御が里家から連れ出された挙げ句、怯えて逃げていたのだとか。妹御が近くに来ているはずなので、追っ手に捕まる前に保護して欲しい、と……。あの山ざ……いえ、娘は、その追っ手とやらは、斎王さまと縁続きになることを目的に、妹御を手に入れようとしているのではないかと思っていたようです。ディエーンでは聞きませんが、他国では次代さまの姻戚が王位を継いだ例もあると、スカーが言っていたせいもあるでしょうが」

「なるほどね」

ファティ・リンシャは、得心がいったという顔でうなずいた。

「双子には昔から、共鳴関係が存在することも少なくないし、斎王に選ばれるほどの力のある子供なら、きっと勘違いではないでしょう。ナーシアの懸念もね……ディエーンの貴族は、一部の例外を除いて、始祖王の血を受け継いでいるから、これまでなかったんでしょうけれど、他国では確かに、たまにあることだわ、新たな柱神の肉親の伴侶が、玉座を奪りにいくという話はね。けれど、そういうことなら、ナーシアは斎王院に戻る途中で、その子のことを見つけたのでしょう。保護するつもりが、一緒に追っ手に捕まって、連れて行かれたというのが、一番考えられそうな線かしら」

「ですが、スカーたちも調べていますが、一切の痕跡が、いまだに見つからないんです。よほど用意周到に計画を立てたとしてもこうはうまくいくまいというほどに、です。偶然の出来事で、そんなことになるでしょうか？」

ガスカールの疑問はもっともなものだったが、人生経験豊富な――豊富すぎると言ってもいいだろう、恐らく二百歳は軽く超えているはずなのだから――老婦人は、「わかってないわね」と、呆れたように肩をすくめた。

「偶然を馬鹿にしてはいけないわ。偶然とは、思いがけないことが起こるからこそ偶然というのよ。そして、恐ろしいことに、たまに二度三度重なったりするものなの。思いがけないことが二度も三度も重なってごらんなさい、ひとのひとりやふたり、煙のように消えたところでな

んの不思議もないでしょう？」

ないでしょう――と問われても、ガスカールには返す言葉がなかった。

「……普通、そんなことはあり得ないと考えませんか？」

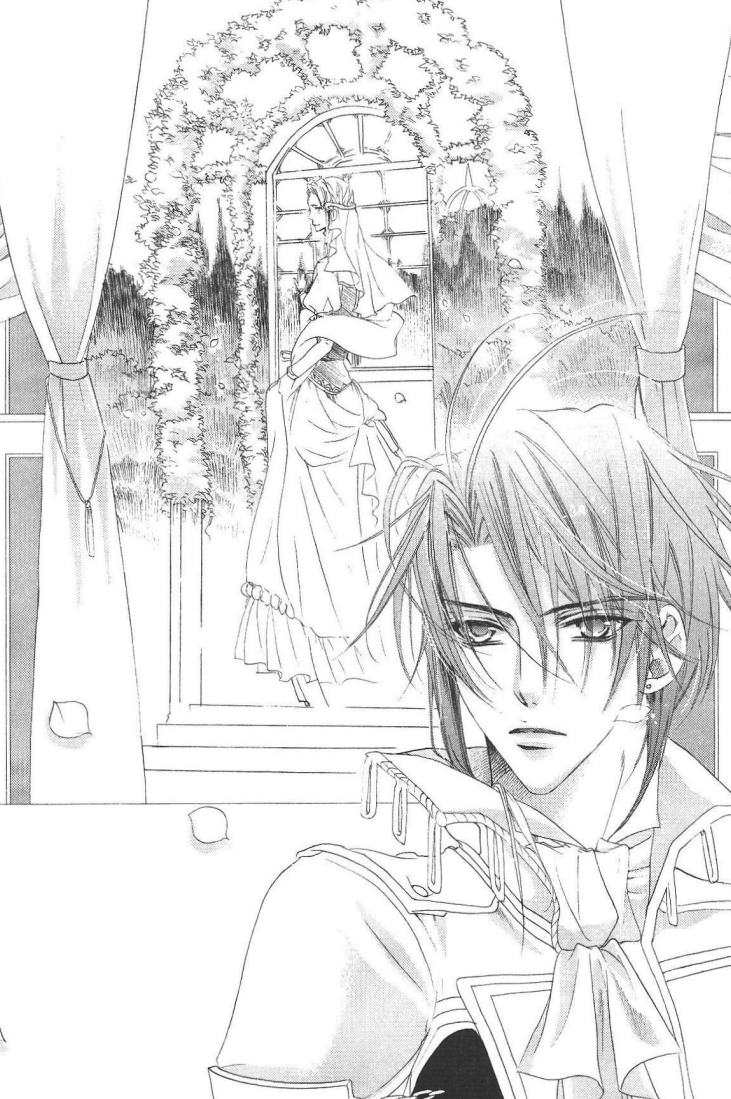
「普通はね、確かにそうでしょう。けれど、カール。あなたはあの子のことを調べたと言っていたけれど、あの子が故郷でなんと呼ばれていたのか、知らないの？　不幸中の幸いの権化、よ？　あの子は、普通だったらあり得ない状況で事故に巻き込まれたり怪我をしたりして、しかも普通だったら絶対助からないような状況なのに助かってきたの。あり得ないだなんて言葉は、あの子に関しては意味がないのよ」

それは――。

（これから、あの娘が選定者としての務めを果たす間、普通だったらあり得ない事故まで想定して守らなければならないということなのか？　そうなのか？）

斎王たちを引き連れて、ドレスのまま木に登ったり、王宮の庭でたき火を熾して栗を破裂させたり――これまでだって、充分すぎるほど『あり得ない』言動で周囲を振り回してきたくせに、この上『度重なる偶然』などという凶器まで振り回すつもりなのか、あの娘は!?

本人が聞いたら「失礼ね！　一度だって好きで厄介事に巻き込まれたことなんてないわよ！」と反論すること間違いなしなことを考えて、ガスカールは目の前が暗くなるような錯覚



に見舞われた。

しかし、ファティ・リンシャは違った。

なぜか、うきうきした様子で、「さすがだわ」とつぶやいている。

「ファティ・リンシャ？」

なにがさすがなんです――と問いかけるより先に、彼女はソファから立ち上がり、「最近足腰が弱くなって」という台詞が嘘のような、軽やかな足取りで歩き出した。

庭に面したテラスへのガラス戸に手をかけながら、振り返ったファティ・リンシャは、朗らかな笑顔でこう告げる。

「精霊たちに、話を聞いてくるわ。大丈夫よ、ナーシアの運を信じなさいな。少なくとも、いまのところは命の危険には晒されていないはずだから」

敬愛する彼女の言葉とはいえ、ガスカールにはすぐにうなずくことができなかった。

運は運でも『悪運』や『凶運』と呼ばれる代物に愛されまくっている娘のことを――しかも今もなお現在進行形で厄介事に巻き込まれ中である――案じるなというほうが無理である。

しかし、ガスカールは同時に、ファティ・リンシャに口では勝てないこともしっかり学習していた。

結局、彼は反論せず、沈黙を以て彼女に答えたのである――。

「ふ、ふふ」

養い児といるときは、我慢していたのだけれど、庭に出たら、もう堪えられなかった。

ディエーンの次代柱神選定のため、斎王院に詰め切り状態にあるはずのガスカールが、突然訪れたときには、いったい何が起こったのかと不安に思い、実際、ナルレイシアが行方不明だという知らせを聞いたときは衝撃を受けたのだけれど。

事情を訥々とした口調で語るガスカールの様子を見ている内に、なんだか笑いたくて仕方がなくなってしまった。

知れば、あの生真面目な青年のことだから、きっとむっとするだろうし、同時に自分に気遣って、それを表面に出さないように必死に努力するだろうけれど。それでも隠しきれないだろう「むっ」に、やはり自分は笑ってしまうに違いない。

「本当に、なんという早業かしら」

脳裏に、現在行方が知れないという、金髪の少女の顔が浮かんだ。

心配していないわけではない。怪我でもしてやしないかと、それは本当に気に掛かる。

これまで無事にすんできたのだから、今回も大丈夫――とは決して言い切れないのが運命だ。わかっている。

それでも、嬉しい思いを抑えることができないのだ――本人、自覚してはいないだろうが、この数ヶ月で劇的に変わった養い児の様子ゆえに。

前王家の最後の王女を妻に迎えた――表向きには、ファラスース王朝の開祖である王と、エルスース王家最後の王女との間に生まれた娘ということになっているのだが――エルスカーネ公爵家は、ディエーンにおいては微妙な位置に立たされつづけた家だった。王家の交代によって、権力の座から遠ざけられた貴族のなかには、唯一、エルスースの直系の血を受け継ぐ、エルスカーネ家を御輿に担ごうと考える者も少なくなかった。

そんななかで、エルスース家の特徴である黒髪と紫の瞳を持った子供――ガスカールが生まれたのは、彼にとっても周囲にとっても不幸な偶然だった。

現王家を慕う者たちにとっては、その色彩は不幸を予感させるものでしかなく、逆に王家に反感を抱く者たちにとっては希望の光と感じられたに違いない。

あの悲劇が、実際どちらの勢力によって引き起こされたのか、ファティ・リンシャはアマンシールから聞かされてはいない。周囲がどう思おうと、当時のエルスカーネ公爵は王家に忠実であることを選び、運命的な色彩を受け継いだ我が子を、反王家派に係わらせまいとしていた

からだ。

だから……あの悲劇は、ガスカールとその両親、どちらが狙われた結果であるのか、はっきりしないのだ。

だが、少なくともガスカールはそれが、自分の存在ゆえに起こったものだということを、はっきりと自覚していた。

自分さえいなければ――と、自らを責めつづける幼い姿を黙って見てはいられず、アマンシールが手を差し伸べたものの、聡明すぎる子供は、相手の立場を気遣い、その胸に飛び込むことができなかった。

『助けてください』

アマンシールに頼まれ、会ってみた子供は、悲しすぎるほどに大人びた目をしていた。

わがままを言うことを、自分に禁じた子供だった。

だからまず、彼女は料理を振る舞い、その子供から本音の感想を引き出すことから始めた。

躾の行き届いた子供は、好き嫌いを口にすることはなかったが、本当に『好き嫌い』がないわけではないのは、少し注意して見ていればわかることだった。

だから彼女は敢えて、彼が嬉しそうに食べる料理と、苦手なのを必死に隠しながら食べるそれとを一緒に出しつづけた。

『どちらが美味しい？』

と尋ねても、最初の内は『どちらも美味しいです』としか答えなかった。

素直に自分の好みを口にするようになるまでに、実に二年近くかかった。慕ってくれて、ある時期以降はほとんどこの屋敷に住んでいるといっても過言でない状態になって――そのことは本当に嬉しかったけれど、ガスカールの心に根付いた影を払拭することはできなかった。

自らの立場と、自分の存在の意味を、胸に刻みこんだ少年は、常に身を退くことのかなう位置に立つことを選びつづけていた――そう、最後には自分の命で片をつけるつもりだとでも言うように。

スカルトードという友人を得ても、それは変わらなかった。

彼を愛するがゆえに、彼のそんな態度を、周囲の人間がどれほど悲しく思っているのか、きっと本人はわかっていない。いや、わかっていたとしても、改めようとはしなかったかもしれない――自らを災いの種だと信じているからこそ。

ところが、だ。

ナルレイシアという少女が現れてからというもの、彼の鎧は剝がれ始めた。

前もって調査していた報告書の内容が内容だっただけに、会ってもいないうちから、彼女に対して最悪な印象を抱いていたガスカールは、傍で見ていてもはっきりわかるぐらいに……非

常に態度が悪かった。

なまじ見目がいいだけに『気に入らない』光線を全身から放つ彼の姿は、慣れない者なら心臓に負担を感じてもおかしくないほど、迫力満点なものだった。

しかし、何度もあり得ない事故に巻き込まれ、死の淵から生還してきたナルレイシアの心臓と根性は筋金入りで、怯えるどころか正面から対決姿勢を取ったのだ。

途中から、ナルレイシアは斎王院に移ってしまったため、その対決ぶりを直接目にすることはなくなったわけだけれど、アマンシールや、親しい精霊からの報告で、どんな騒ぎが持ち上がったか、知るのに苦労はなかった。

聞くたび、笑いを抑えられなかったものだが……先ほどのガスカールの様子を見て確信した。

明らかに、彼の心の鎧は剝がれ落ちている。

喜ばしいことだった。ナルレイシアには、是非ともこれからも、頑張ってもらわなくてはいけない。

そのためにも――。

気持ちの良い風が吹く庭の一角で、彼女は空に向かって両腕を伸ばし、ささやきかけた。

「……精霊たちよ。我が親愛なる友たちよ……」

彼女の呼びかけに答えるように、彼女の一番好きな花の香りを乗せた風が、ふわりとその頬をやさしく撫でた——。

32

気持ちの良い季節の昼間にも拘わらず、その部屋の窓は閉ざされ、光そのものを遮るほどに厚いカーテンに覆われていた。

薄暗い室内には、ある独特な香りが満ちており、そこに足を踏み入れた青年は、気づくなり眉間にしわを寄せた。

（なるほどね……だからか、「その必要はない」ってのは）

部屋のほぼ中心にある寝台の上には、少女が眠っている。

自然な眠りでないことは、夜具に一切の乱れがないことで見て取れる。普通、どんなに気持ちよく熟睡していても、寝返りのひとつやふたつは打つものだ。その痕跡が見えないということは、寝返りを打つ力さえ残っていないか、その眠りが自然のものでないからか、だ。

こっそり忍びこんだ手前、灯りをつけたり、カーテンを開くわけにもいかないから、はっきりとは言い切れないが、この場合、後者に思えた。

室内に漂う香りが、なによりの証だ。

青年――リーインは、その香りの正体を知っていた。

冥眠香。

強烈な催眠効果で知られる香だ。ただし、一般に出回っているものに加え、ほかにも色々配合されているようだ。寝返りも打たないほどに深い眠りを誘うには、冥眠香だけでは役者不足なのだ。

(確かに、このお嬢さんが何をしでかすか、はらはらしながら見張ってるよりは、眠りっぱなしの状態にしとく方が、面倒がなくて楽だよな。おまけに……この、妙に甘ったるい香りまで嗅がせてたら、目覚めた時には立派な中毒患者の出来上がりってわけだろうし)

ある種の芥子には、特別な効能を持つものがある。

怪我人や病人の痛みを和らげるというのがそれで、痛みそのものがもたらす体力の消耗を減らすことで、助かる道を広げられると言われている。

もっとも、毒と薬は紙一重で、摂取し続けると中毒症状を起こすという弊害もある。

だから、健康な者がこれを摂取することは、堅く禁じられているのだが。

(お嬢さんが、外に連絡取ろうとした段階で、懐柔できる可能性なしだと判断したんだろうが……中毒にさせて言いなりにさせようってのは、格好良くないねえ)

どちらかと言えば裏の稼業に近いところで生きてきたリーインは、だから、美学というほどのこだわりを持っているわけではなかった。

この部屋に忍びこんだのだって、単なる好奇心であって、間違ってもこの少女を助けてやろうと思ったからではない。

ただ、これまでの経験上、よろしくないことが起こる前に覚える、うなじのあたりがぞわぞわする感覚が、日に日に強くなってきたせいだった。

身の危険を感じるほどのものではない……が、無視していられるほどささやかなものでもない。

どうしたものか、と数瞬思案し、結局リーインはちょっとだけ手を加えて、その部屋を出ることにした。

（あとは、運次第だ。ツキに愛されてるといいな、お嬢さん）

入ったとき同様、誰にも気取られることなく、部屋を出たリーインは、雇用主からあてがわれた部屋に戻った。

眠る少女が『不幸中の幸いの権化』と呼ばれる、運がいいのか悪いのか、ぎりぎりのところで常に判断の分かれる存在であることを、不幸にして――あるいは、幸いにも？――彼は知らなかった。

そこは、閉ざされた部屋だった。
窓には格子がはまり、部屋の扉には外側から鍵がかけられている。
その部屋の寝台に、囚われの少女リオライーシャは、俯せになってきつく唇を噛みしめていた。
あの日――ロスタロイドの路地裏で、男たちに捕まった後、気がつけばここに閉じこめられていた。一緒にいたはずの金髪の少女の姿はなく、彼女がどうなったのか知りたくて、身の回りを世話してくれる女性に尋ねたのだけれど、答えてはもらえなかった。
多分、一緒に捕まったのだと思う。
自分を助けるために――。
あのお姉さんのことを思うと、リオライーシャの胸は申し訳なさでいっぱいになる。
(ご免なさい、お姉さん……ご免なさい)
自分が助けを求めたりしなければ、巻き込むことはなかったのに!
勝手に神様の御遣いだと勘違いして、やさしいお姉さんを危険に引きずりこんでしまった。

この檻のなかから、自分はきっと逃げ出せないだろう——そう思うと涙が出てくる。
最初に連れて行かれた屋敷では、それなりに許されていた自由が、ここにはない。食事も水も着替えも——なにもかも、部屋の外から持ち込まれ、用がすむと同時に持ち去られるようになった。
水でさえ、欲しいときに持って来て貰わなければ、手に入らなくなったのだ。
そこに、リオライーシャは自分を攫った相手の、悪意に満ちた優越感を見いだしていた。
一杯の水ですら、お前の自由になるものはないのだと。
その気になれば、お前をこの部屋で餓死させることさえできるのだと。
それが嫌なら従え——否、屈服しろ、と。
未だ、顔を見たこともない誘拐者は、言葉ではなく態度で、そう告げているのだ。
見えないだけに、その男の姿は、頭のなかでどんどん大きく、黒くなっていく。
いまでは、小山のように大きく感じられるほどに育ってしまった。
(駄目なのに……怖がってばかりいたら、心がどんどん小さくなっていくだけなのに)
もっと小さなころ、怖い夢を見て泣き出したリオライーシャに、田舎のお母さん——夢で感じ取れるユーカリィヤの母親のことは『お屋敷のお母さん』と呼んでいた——が教えてくれたことだった。

『怖いと思うとね、ますます怖くなるもんだよ。今度、悪い夢を見たら、怖がるのをちょっとだけ我慢して、じっくりと見つめてごらん？　真っ黒くて大きなお化けだと思っていたものが、本当は子犬だったりカラスだったりするかもしれないよ？』

と――。

その通りだった。怖いのを我慢して、じぃっと見つめていると――夢のなかだからかもしれないけれど――大きく見えていたお化けは、ゆっくりと輪郭がぼやけていって、別の姿に変わったりした。

それは、不注意で壊した花瓶だったり――怒られるのが怖くて内緒にしていたのだ――寒くて拭き掃除をさぼった床の汚れだったりした。

もっとも、いくら目をこらしても、小さくならないお化けが出てくることもあったけれど、そういう時のための、とっておきの呪文も、リオライーシャは田舎のお母さんに教えてもらっていた。

『あんたなんて大きくない！　ちっちゃい、ちっちゃい、ちっちゃい、ちっちゃい！』

そう叫ぶと、本当にお化けはちっちゃくなるのだ。

代わりに怖がったままだと、お化けはどんどん大きくなる。

だから、リオライーシャはお化けに負けない心を保とうとしてきたのだ……けれど。

「ユーリ……どうしよう。お化けのこと、ちっちゃいって思えないよ……」

この檻のような部屋に閉じこめられて以来、夢でさえ気配を感じ取れなくなってしまった双子の姉に、リオライーシャは話しかける。

「どんどん、どんどん、大きくなってくよ……怖くないって思おうとすればするだけ、怖いって気持ちが育って、押しつぶされそう……どうしたら、いい？」

答えが返らないことがわかっていても、彼女は尋ねずにはいられなかった。

「ユーリ……お姉さん……」

つぶやいた、その瞬間――。

不意の衝撃が、リオライーシャを襲った！

どくん、と胸が大きく脈打った。

痛いほどに激しく感じる動悸に、彼女は思わず胸に手を当て、呆然とつぶやいた。

「うそ……お姉さん……？」

信じられなくて――否、信じたくなくて、リオライーシャは必死に感覚を研ぎ澄まし、衝撃を受けた理由が嘘だという証拠を探した。

（そんなはず、ない！）

そんなことが、あっていいわけがないのだ！

お姉さんの――あの人の気配が、完全に消失するだなんてことは！

「……い」

がばりと寝台から身を起こし、リオライーシャは次の瞬間叫んでいた。

「いやあぁぁぁぁっ！」

結界術師リーインの術によって、完全に外界から遮断されているはずの室内で、嵐が、巻き起こった――。

ロスタロイドの下町に近い一画にある食堂兼宿屋である『踊る赤馬亭』の二階の一室では、三人の男女が、難しい表情で顔をつきあわせていた。

宿の女将ランディータと、ガライラ大公国の柱神の縁者であるスカルトード、そしてエルスカーネ公爵であるガスカールの三人である。

三人が三人とも難しい顔をしているのは、ファティ・リンシャから得た情報の内容のせいだった。

「つまり、ファティ・リンシャのお力を持ってしても探れない屋敷が三つもあるってことです

か？」

せっかくの超絶的な美貌を、苦々しく歪めて、情報提供者に問いかけたのはスカルトードだった。

やはり、せっかくの二枚目の顔を、不機嫌に歪めたままうなずくのはガスカールだ。

「ああ。精霊の出入りも許さないほどの結界が敷かれているそうだ。後ろ暗いところがあると言ってるも同然の仕掛けだが……まさか、三つもあるとは思わなかった」

ファティ・リンシャの頼みに応えた精霊たちは、必死にナルレイシアを捜してくれた。

しかし、彼女を見つけることはできず、代わりに見つけたのは、精霊すら立ち入れない、強固な結界を張った屋敷が三つ――というわけだったのだ。

「……ですよねえ。というか、この時期、そこまで厳重に守りを固めないといけない秘密を抱えてる家が三つもあるというのは……大変ですねえ」

同情たっぷりのスカルトードの言葉に、「他人事のように言うな！」と怒鳴りかけ、しかし相手がディエーン人でないことを思い出したガスカールは、無理矢理言葉を呑み込んだ。

「しかもそれが、マルシアス家にアストイア家にナサリエル家ときている。洗うのは骨だな」

国家直属の情報機関の一員であるランディータは、うんざりしたような顔で洩らした。

それももっともなことで、この三家は、現在の王家にとって、かなり微妙な位置関係にある

有力貴族の筆頭だった。

マルシアス家は、数代前に隣接する領主とのもめ事が起こった際、王が取った判断に不満を抱き、以来南の脅威と見なされるようになった。

アストイア家は半世紀ほど前に、ディエーンに吸収合併された小さな公国の国主の流れを汲む家なのだが、なにかと王家に対して批判的な態度を取ることで、半ば持てあまされている一族だ。とはいえ、旧公国の生き残りの豪族たちからは絶大な支持を受けつづけているため、扱いが難しい。

そうして、ナサリエル家だが——ここが一番厄介と言えなくもない。

先代ナサリエル公爵は、先々代の国王の第一王子として生まれたひとだったのだ。生来病弱であったため、その弟である第二王子が王太子に立てられたわけなのだが、爵位を息子に譲ったころから、不穏な言動が目立つようになった。

つまり、本来なら王位につくのは、自分の息子であったはずだ——というのだ。自分は生憎国政をこなすだけの体力がなかったのだから仕方がないが、健康に生まれた息子には、本来の権利が認められてもいいはずだ、と。

老害という言葉が、そんな先代公爵の言葉を耳にした者たちの脳裏を掠めたが、結局大事には至らなかった。

代替わりした公爵は、そうした父親の不穏な言動の影響を受けているようには見えなかったからである。

そして、その先代公爵も、五年前に逝去した。

問題なのは、にも拘わらず、精霊の介入を許さないほどの結界が保たれているという事実だ。

「三つとも臭いけど、最後のが一番臭い気がする」

慎重な判断が求められていることは、わかっているだろうに――ランディータはあっさりきっぱり言い切った。

苦虫を噛みつぶしたような顔で、スカルトードも同意した。

「臭いですね。三つ子の魂百まで……というのは、人間が生まれ変わる可能性を無視した言葉だと思ってましたけど、野心もなにもない清廉潔白な方は、普通精霊のことまで考えて結界なんて敷かないでしょうしねえ……」

そう言って、ふたりは揃ってガスカールを見つめた。

「どんな奴？」

「どういったお人柄なんでしょう？」

二対の瞳に睨まれ……もとい、見つめられて、ガスカールは現ナサリエル公爵に関する記憶

をさらった。

「人当たりは、いい……」

一度も、ガスカールは彼から侮蔑めいた言葉を投げつけられた覚えはない。

それどころか、却って彼に対して同情的で——だが。

「よくしてもらったことは覚えているのだが、なぜだか、そうされる度に落ち着かない感覚を覚えたような……。あと、却って口汚く罵られたほうが、彼に優しくされるより疲れなかったというか……とにかく、つかみ所のないひとだった」

その言葉に、スカルトードは呆れかえった様子で息をついた。

「カール、君ね。せっかく優秀な感覚と、それを判断できる頭があるんだから、もっと有効に利用することを覚えるんだよ。気に入った相手や、逆にとことん気に入らない相手に対しては、あれだけ的確に判断を下すくせに、興味を覚えない相手に対しての、そのぼやーっとした感想ってば何事だよ!? まさか、世の中敵と味方しかいないだなんて、考えてないだろう!?」

スカルトードの問いに——実のところ、即答できなかった。

図星だったからだ。

とはいえ、それをみすみす認めるのも口惜しい。

(いや、違う。いま一番大切なことは、わたしの心のありようとかではないはずで……)

と、無自覚に彼が意識の迷宮に入りこんだ、まさにその瞬間――。
鼓膜が破れるかと思うほどの地響きが、起こった。
「な、なにが……!?」
起こったのか――とつぶやくより先に、ガスカールは窓に向かって走り出していた。
鍵のかかっていない、観音開きの窓を開けるなり、彼は身を乗り出し、なにが起こったのかを確認しようとした。
その彼の目に飛び込んできたのは――到底現実とは思えない光景だった。
竜が――ところどころに土を被った金色の竜が、身をくねらせながら暴れていたのだ。

33

突然、大地が揺れた。
外を歩いていたロスタロイドの住人たちは、慌(あわ)ててそばの建物の壁につかまり、互いに顔を見合わせた。
「……なんだ、これは……？」
こんなことは、これまでロスタロイドではなかった。
「まさか、これが地震というやつか？」
ひとりが、信じられないと言いたげにつぶやいた。
精霊の加護厚きこの地にあって、それは考えられないことだった。ロスタロイドで生まれ育った者の多くは、生涯地震(しょうがいじしん)を知らずに終わるのだ。
当然、その対処の仕方も知らない。
「どうすりゃいいんだ……？　待ってたら治まるのか？」

「家に入っていいのかね、それとも外にいたほうが……？」
「おい！　いまの揺れのせいで、向こうの建物の壁の一部が崩れたそうだぞ！　怪我人が出たらしい、手の空いてるやつは行くぞ！」
呼びかける声に、「おう」と答えて振り返った若い男が、突然凍り付いたように動きを止めた。
その目は、西の方角の空を見つめている。
「おい、どうした。怪我人がいるんだ、急いで助けないと……」
男の様子に訝りを覚えながらも、促すように肩をたたいた別の男は、若い男の視線をたどり――そして、同じように凍り付いた。
地震だけでも、信じられないと思っていたというのに――空の向こうでは、この世のものではない光景が繰り広げられていたのだ！
かなりの距離があるにも拘わらず、その巨大な姿は、誰の目にもはっきりと見て取れた。
「き、金色の……」
蛇に似た、しかし違うものが、巨体をくねらせ、空に向かって咆吼を上げていた。
多くの者が、それに似たものを目にしたことがあった――神殿の壁画に描かれた創世神話図のなかで！

「黄神……さま……!?」

誰かが、絞り出すような声でつぶやいた。

「黄神さまが……降臨なさった!?」

その声に含まれた恐怖は、瞬く間に周囲に伝染していった。

創世七神である虹神は、その強大な神力ゆえに、自ら生み出した世界に降りることはないと伝えられている。

かつて、虹神のひとりが、その腕を世界に伸ばしただけで、世界は天変地異に襲われ、生まれて間もない地上の生き物たちの多くが命を落としたのだ。そのことに気づき、嘆いた虹神たちは、愛する世界に触れることを自らに禁じたのだという。

それゆえ、神々の降臨は世界の終末を意味すると信じられている。

「黄神さまが……！」

「黄神さまが……っっ!?」

恐怖のつぶやきは、ひとつ、ふたつと増えて行き、ついには嵐のように広まっていった――。

「まずいな」
『踊る赤馬亭』で、金色の竜の姿を目にした途端、椅子から立ち上がってガスカールが呻いた。
「まずいですね」
うなずくスカルトードも厳しい顔だった。
「あれが本物であろうとなかろうと、このままじゃみんな、恐慌状態に陥って、とんでもない騒ぎになっちまう！」
剛胆なランディータの顔色も変わっていた。
世界の終焉だと、ロスタロイド中の人間が信じたりしたら、大変なことになる。
絶望に打ちのめされた者たちが、どんな行動に走るのか、誰にも想像はできないのだ。
「まずは王宮に行って、大事ないと説明しないと……」
と、口にしながら、ガスカールは疑念を捨てきれなかった。
本当に大丈夫なのか、自信が持てなかったのだ。だが、まず王家と各貴族たちの動揺を鎮めないことには話が始まらない。国の中枢たる彼らが浮き足立ち、ロスタロイドから脱出でもしようものなら、住人たちの恐怖は頂点に達してしまうに違いないのだから！

「あたしは男たちに言って、警邏の連中を動かすようにするよ。自暴自棄になった挙げ句、略奪や放火に走る輩が出ないとも限らないからね！」

「なら、わたしは神殿に向かいましょう……一応他国のとはいえ、柱神さまの縁者であるわたしが大丈夫だと言えば、少しは納得してくれるでしょうし、市民も神官の言葉の方を信じたがるでしょうからね」

実際のところ、なにが起こったのかはわからないが、いまは一刻を争う。

それぞれがやることを確認し合うと、三人はそのまま駆け出そうとした。

だが、そのときである。

『待ちなさい』

と、静かな声がかけられた。

「え？」

声のしたほうを振り返ったガスカールは、そこに、半ば透けた格好で出現した養い親その一の姿を見いだし、目を瞠った。

「アマンシールさま!?」

黒髪に灰色の瞳を持つ、穏やかそうな現人神は、この事態にあっても落ち着いた態度を崩さない。

『心配することはない。あれは、かの神の似姿に過ぎないからね。すでに陛下にはお伝えしている。彼らが浮き足立つことはないから、安心しなさい』

そう告げて、柔らかく微笑んだ後、アマンシールは褐色の肌の美女に目を向けた。

『お嬢さんには、是非頑張っていただかなくてはならないが、よろしく頼めるかな？　すぐに神官たちも総出で協力してくれるとは思うが、早まった者が出ないうちに、なるべく皆を落ち着かせてほしい。わたしが、大丈夫だと言っていたことを伝えてくれれば、少しは役に立つかと思う』

決して早口で言っているわけではないというのに、その言葉は瞬時に頭に入ってくる。

恐らく、アマンシールは実際の声ではなく、思考を直接伝えてきているのだ。

『少しどころか千人力です！　かしこまりました、すぐに向かわせていただきますね、失礼します！』

柱神に会った興奮を隠せないのか、顔を真っ赤にしてランディータが部屋を飛び出して行った。

「では、わたしも――」

そう言って後を追おうとしたスカルトードを、アマンシールが呼び止める。

『各神殿には、もう伝えてあるからこちらも大丈夫だ。君には、ほかにやってもらわなければ

ならないことがある。君にしかできないことだ……』

わかるだろう――と、視線で問われたスカルトードが、はっと息を呑んだ。

慌てて、窓に駆け寄ると、竜に似た巨体の出現した方向を見つめる。

それは――その方向には。

「……そういうことか！」

ガスカールもまた、同じことに気づいたのだろう。

「先に行く！」

言い置くと同時に、駆け出した。

「では、わたしも――」

と言ったスカルトードは、一瞬、なんとも言えない顔でアマンシールを振り返った。

「……ご推薦いただいたときには、完全な名誉職だと思っておりましたのに」

少しばかり、恨みがましそうな声だった――騙された、と灰緑の瞳が語っている。

しかし、すでに二世紀を生きている神の眷属は澄ました顔で答える。

『君を退屈させないことが、友人との約束だったのでね』

そんな約束は、守っていただかなくてもよかったのに――喉まで出かかった言葉を必死に呑み込み、スカルトードはため息をひとつ洩らした。



その衝撃は、突然に襲ってきた。

「な、なんだ!?」

なにが起こったのか把握できず、長椅子から放り出される格好で、床に投げ出されたリーイン・ル・ファンは、目を白黒させてつぶやいた。

すぐに立ち上がろうとして、彼はそれがかなわないことを知った。

踏みしめるべき大地が、揺れていた。

いや——裂けていたのだ！

窓から差し込んでくる、陽光以上にまぶしい光に気づき、目を向けた彼は、屋敷の広大な庭に大きな亀裂が走り、そこから金色の、細長い生き物が身をくねらせながら出現するのを目の当たりにした。

息が止まるかと思うほどの衝撃を覚えた彼が、最初に発した言葉は……「やばい！」だった。そうして彼は、すぐに必要最低限の荷物をまとめるなり、あてがわれた部屋から飛び出したのである。

（まずい……どう考えても、これはまずい！）

生きることを最優先する本能が、ここは危険だと告げていた。

あの巨大な長虫が、なによりの証だ。

あれは竜に似て、竜にあらざるもの。

竜とはこの世界を創造した虹神七神以外にはおらず、その強大すぎる力ゆえに、降臨がかなわぬ存在だからだ。

だから、あれは竜ではない。ただし、その眷属か影である可能性は高い。

「やっぱ、信頼関係結べない客とはつきあうもんじゃねえな」

危険かもしれないと、本能が警鐘を鳴らしていると自覚した時点で、さっさと身を退かなかったことを後悔しながら、リーインは走った。

あのときは本当に、ここまで大事になるとは想像もしておらず、だからこそ暢気に後金への未練に引きずられたりしたわけだが。

「こんなことになると先にわかってたら……っっ！」

誰が拘わったものか――と、毒づいた瞬間、リーインは西方世界ではあまり馴染みのない、しかし故郷の東方にあっては、ごく当たり前に使われる言葉を思い出した。

曰く――神は祟る、と。

東方世界と西方世界では、神々の名も違い、それぞれの属性もかなり違う。だが、根源は同じなのだ——世界を創造したのが七人の神であることは。

東方では竜神と、西方では虹神と——呼ばれ方が異なるだけで。

そして、元々が同じ存在なら、こちらでも同じことが言えるかもしれない——竜の眷属をあれだけ暴れさせるような真似をしたのは、誓って自分ではないが、そのきっかけに拘わったかもしれないという自覚は……ある。

だとしたら、祟られる可能性がなきにしもあらず、だ。

それは、どうにも遠慮したい成り行きだった。

(ここはひとつ、ご機嫌のひとつも取っとくか)

我が身大事なリーインは、屋敷の混乱に乗じて、ナルレイシアが眠らされている部屋に向かった。

室内では、相変わらず冥眠香が焚かれていた。

習慣性のある危険な成分だけは、香炉の内側に付着するよう術をかけてあったから、少女は単に眠っているだけのはず——だったのだが。

「…… 魂が、抜けてやがる……もしかして、この惨状の原因はそれか?」

魂が抜けた肉体は、当たり前の気配を放たない——仮死の状態にあるからだ。

よほどに鋭敏な感覚の持ち主でも、ある程度以上の経験を積まなければ、仮死と真の死を見分けるのは至難の業なのだ。

離魂の術自体も、非常な危険とされているため、上位神官の一部にしか伝えられていないはずだ。だとしたら、この暴走を起こした人物は、この少女が死んだのだと誤解した可能性が高い。

思わず、ため息が洩れた。

「ほーんと、ひとっかけらの真実も明かしやがらなかったな、あの野郎。選の巫女だけでも厄介だと思ってたのに、御柱さままで拐かしてただなんて、命知らずにもほどがある……つーか、救いようのない、馬鹿？」

当然のことながら、雇い主を弁護する声はどこからも上がらない。

リーインはひょい、と香炉を手に取ると、窓際まで持って行き、外に捨てた。封じの術はすでに解いてあるから簡単だった。

彼はそのまま、玄関に向かい——見とがめられては厄介だと思ったため、自分にだけは目くらましの術をかけていた——堂々と屋敷を後にした。

竜もどきが出現したのは裏庭の方だったのだが、正門前の通りにはひとが溢れていた。野次馬ではない。一刻も早くこの近辺から遠ざかろうと、近所の住人たちが荷物をまとめ、逃げ出

していたのだ。

（誰だって、神罰は怖いよなぁ）

実際は、少し違うのだが、似たようなものだと言えば言えなくもない。

そんななか、人の流れに逆らうように、必死な顔で、ナサリエル公爵家の別邸である屋敷に向かって駆けてくる子供の姿があった。

十になるかならないかという少女が、一所懸命、走ってくる。しかし逃げようとする大人にぶつかっては転び、ときに「邪魔だ！」と突き飛ばされ、あちこち傷だらけになりながら、それでも少女は足を止めない。

何度目か、少女が男に突き飛ばされたとき、リーインは倒れかけた小さな身体を抱き止めた。見るに見かねてのことだった。

少女は一瞬、なにが起こったのか理解できない顔だったが、リーインがそのまま、身体ごと抱き上げたことで、助けられたことを悟ったようだった。

「あ、ありがとう、お兄ちゃん」

東方世界出身のリーインは、実際の年齢より若く見られることが多く、仕事の面などでは、そのせいで不都合が生じることもあるのだが……このときばかりは、悪くない、と思った。

少し前だが、同郷からの旅行者の子供に、「おじちゃん」と呼ばれて、かなりけっこう深く

傷ついたからだ。

気をよくしたリーインは、少しばかり少女の事情を聞いてやる気になった。

「おう。危ないぞ、どうしてこっちに来ようだなんて思ったんだ？」

少女は、問題の屋敷を指さして、

「あのね、あのお屋敷で、お姉ちゃんが働いてるの。お隣のお姉ちゃんも一緒に働いてるんだけど、お隣のお姉ちゃんはもう家に戻ってきてるのに、お姉ちゃん、まだ帰って来てないの。もしかしたら、怪我して逃げられないでいるのかもしれないと思って、あたし、お姉ちゃんのこと迎えにきたの」

と答えた。

頭のいい子供だと、リーインは内心感心した——皆が混乱しているなかで、きちんと相手に通じるように言葉を選んでいる。

だが、だからこそ、少女を向かわせてはいけない、と思う。自分の予想が正しければ——外れない自信は有り余るほどにある——件の屋敷は、これからさらに大変な騒ぎに巻き込まれることとなる。そんななかに、こんないたいけな少女を行かせるのは気が進まない。

「そうか……そりゃあ、心配だな。だけどな、嬢ちゃん。嬢ちゃんの言うとおり、お姉ちゃんが怪我でもしてたら、嬢ちゃんひとりじゃ、助けるのも大変だと思うぞ？」

その自覚はあるのか、少女は顔をくしゃりと歪め、「でも、でも……」とつぶやいた。

いじめるつもりなど毛頭なかったから、リーインは懐から、ナルレイシアの持っていた神聖硬貨を取り出し、少女の手に握らせた。

「綺麗……これ、なに？」

大きく目を瞠って、握らされた硬貨を見つめる少女に、リーインは大まじめな顔で――大嘘をついた。

「神様がお願いを聞いてくれる約束の証だよ。それを持って、大きな神殿に行くんだ。このお屋敷の前で拾いましたって言ったら、神殿のひとが、きっと嬢ちゃんのお姉ちゃんを助けてくれるぜ」

少女の瞳が輝いた。

「ほんと!?」

「ほんと、ほんと」

請け合うリーインに、しかし純真な少女は、迷ったそぶりを見せた。

「……でも、本当はお兄ちゃんから貰ったのに……」

真っ直ぐすぎる性根の子供、侮りがたし。

リーインは一瞬、遠い目になった。

しかし、ぐずぐずしている暇はない。
引きつりそうになる顔に、必死の思いで笑みをたたえて、彼は少女の前に、空いている方の手を差し出した。
「じゃあ、それを一度この手に置いて？」
素直な子供は、言われたままに彼の手に硬貨を落とした。
「次に、取って？」
素直な子供は――以下略。
「ほうら、嬢ちゃんが、拾った」
指摘されて、少女は一瞬目を瞠り――そうして、大きくうなずいた。
「ほんとだ！」
そんなこんなで、なんとかこの件との縁切りを果たすことに成功したリーインは――神聖硬貨に関しては、少女に対する純然たる好意ゆえのものであり、祟りを他人に押しつけるつもりで与えたのではない――未だ消えない竜もどきの巨体を振り返り、改めて大きく息をついた。
（御柱さまの交代時期にある国は鬼門だな。次は御柱さまが当分交代する気配のない国か、御柱さまの守りのない国で仕事を探すことにしよう）
そうしよう、その方がいい。

固く心に誓って、リーイン・ル・ファンは人の流れに身を投じた。
このどさくさにまぎれて、さっさとロスタロイドを出るつもりだった――。

34

暗くて深い、闇の流れのなかに、ナルレイシアは囚われていた。
このまま流されてはいけないと、わかっているのに手足が動かない。
それでも、必死に身体を動かそうとしたとき、じゃらりという音がした。
目だけで、身体を見ると、黒い鎖が、全身を雁字搦めにしばりつけているのがわかった。それ
ればかりではない——鎖は、流れの先につづいており、彼女を引き寄せようとしているようにさえ見えた。
（駄目）
この先に待つのは、なにかよくない、恐ろしいもの。
直感したナルレイシアは、さらにもがいたが、鎖はびくともしなかった。
「や、だ……やだって言ってるのに！」
その叫びも、ただ闇に呑み込まれるばかり——。

昔、幾度か同じような夢を見たことを思い出す。

やはり、こんな風に真っ暗な川のような流れのなかを、どんどん流されていく夢だ。ただし、そのときの流れは、こんなに穏やかなものではなく、何度も溺れかけた。けれど、そのときは、こんな風に身体は縛られていなかったし、遮二無二暴れている内に、紐のようなものを見つけることができた。

あとは夢中でその紐にしがみついていたら……いつの間にか、目が覚めたのだ。

その夢のことを周囲に話すと、皆顔を見合わせ、困ったように沈黙したものだ。

けれど、似たような夢を二度、三度と見ると、どうしてもその正体というか、意味を知りたくてたまらなくなって——謎には貪欲に取り組むのが、ナルレイシアの長所であり欠点だ——繰り返し母にどういうことかと尋ねたところ、ついに忍耐の限界を超えたらしい母に、「そんな、縁起の悪い夢のことを、いつまでも覚えているんじゃありません！」と、恐ろしい形相で叱りつけられた。

あれほど鬼気迫った母の顔を見たのは、あのとき一度きりだ。

もっとも、後になって、自分がその夢を見たのが、決まって死の淵を彷徨っていたときだと気づいて以来、二度と話題にはしなくなったのだけれど。

（まあねえ……海に落ちて死にかけて、雷に打たれて死にかけて、土砂崩れに巻き込まれて死

にかけて。その度、同じ夢見たって言われたら、気も重くなるわよね。ところが本人はその自覚もなく、あれってなんだろうとか、何だと思う？　とか……あーやだわ。わたしだったら一度目で、殴りつけてでも黙らせるわ、きっと）

母はかなり寛大だったのだ――と、そこまで考えたとき、気にするべきところがそこではないことに、ナルレイシアは気づいた。

「って……え!?　じゃあ、わたしったらもしかして、またしても死にかけてるの!?　でもわたし、今回は溺れた覚えも、雷に打たれた覚えも、土砂に生き埋めになった覚えも、馬に蹴られた覚えも、崖から落ちた覚えもないんだけど!?」

とんでもないことを、素っ頓狂な声で叫んだときのことだった。

すぐ近くで、誰かが大きな、大きな息をついたのは。

「それだけの目にあって、よくもまあ生き延びてきたものだわ。ナーシア、そこまで行けば、充分強運の持ち主ですよ」

呆れたような声には聞き覚えがあった。

声のしたほうに、なんとか顔を向けたナルレイシアは、ここにいるはずのないひとの姿を認め、目を丸くした。

水面――流れているのは水ではなく闇だから、闇面と呼ぶべきだろうか――より僅かに上の

中空に、銀髪の見慣れた女性が佇んでいた。
「ファティ・リンシャ!?　なぜ、ここに!?」
まさか――と、悪い考えに走りそうになった彼女の額を、宙に浮かんだまま、その場にしゃがみ込んだ老婦人が指でつついた。
その瞬間――四肢を束縛していた鎖が、ばらばらと崩れ去る。
「お馬鹿さん」
眩しい笑顔でそう言うと――よくよく見ると、その全身は、ほのかな青銀色の光に包まれている――ファティ・リンシャは手を差し伸べてきた。
「わたくしは、ナーシア、あなたを迎えに来たのよ」
その手を取った瞬間、周囲の景色は一変した。
冥府に通じる昏い川から、ナルレイシアは抜け出したのである。

連れ出された場所は、薄ぼんやりとした霧に包まれたような、あまり居心地がいいとは言えない空間だった。

並んで立てる以上、床はあるのだとは思うが、見えない上に、はっきりと足が地についた感覚がないため、どうにも落ち着かない。

（なんで、死にかけたのかはわからないけど、あそこから離れられたってことは、生死の境からは抜け出したってことよね？　でも、それにしては、なんだかはっきりしない感じだなぁ。前見た時は、途中で眩しい光を見たような気がするんだけど……）

ナルレイシアは、自分が冥府の川に紛れ込む原因となったのが、部屋で焚かれていた冥眠香だったことを知らない。

冥眠香――冥府に下るときの如く、深く眠ると名付けられたこの香は、調香師の腕によっては、特殊な効果を持つ場合があるのだ。

最も知られている例が離魂を行うに当たっての援護効果で、離魂術の修行を許された神官は、その初期段階に、この香の助けを借りるのだ。

とは言え、これまで何度も何度も何度も死にかけて、冥府の川を渡りかけた経験を持つ彼女に関しては、抜け出した魂が一足飛びに、馴染み深い場所――本当に縁起でもない――に運ばれてしまうという、普通ではあり得ない効果をもたらしてしまったのだけれど。

後日、そのことをファティ・リンシャから聞かされたナルレイシアは、例えどれほど深刻な不眠症に悩まされようと、決して冥眠香の力だけは借りまいと、心に誓った……というのは、

まあ余談だ。

ともあれ、不思議な空間に連れ出された格好になったナルレイシアは、内心（あれえ？）と首をかしげた。

（これって明らかに夢のつづき、だよねえ……ここ、どう考えても、現実じゃあり得ない空間だし……夢第二弾？　でも、けっこう長いこと、あの川流されてたような気がするんだけど……うーん、夢のなかの時間感覚って、現実のとじゃずれてることも多いから、気にするほどのことはないのかな？）

彼女は暢気にそう考えた。

これが、何度も死線をくぐり抜けてきた強者ゆえの余裕なのか、それとも現状把握能力に欠けるがゆえの能天気さなのか——無自覚な当人に判断できることではない。

だが、ナルレイシアがいつまでも、ぼやーっとしていることを許さない存在がそばにいたことだけは確かな事実だった。

ファティ・リンシャの、叱りつける厳しい声が耳に飛び込んできたのだ。

「なにを、いつまでも寝ぼけているの!?」

実際に頬を叩かれたかと思うほど、力のこもった声だった。

「ファティ・リンシャ……？」

思わず、彼女を振り向いたナルレイシアは、その視線を導くかのように伸ばされた、優美な指の指し示す先に目を移し、次の瞬間息を呑んだ。

そこには、世界の終焉としか思えぬ光景が繰り広げられていたのだ。

地上に、竜が……少なくとも、竜としか思えない存在が、出現していた。

黄色い体色は、内側から放たれる光のためか、金色に輝いて見える。

ディエーンに最も加護を与えると言われている黄神の化身としか思えない、その姿。

「まさか」

つぶやいたナルレイシアに、ファティ・リンシャが「ええ、ご降臨ではないわ」と告げた。

「けれど、そう誤解されるほどの力を、この子に揮わせたのはあなたなのよ」

ファティ・リンシャの目が、灰色の空間の、別の部分に向けられた。

そこに映し出されたのは、綺麗な金髪を、男の子のように短く切った、まだ十代前半とおぼしき少女が、泣き崩れている姿だった。

見間違えようがない、その顔、その姿！

「リオライーシャさま!?　いったい、なぜ、こんなことに!?」

ナルレイシア自身、恐慌状態に陥りかけていた。

なにがどうしてどうなれば、こんなことになるのか――想像もつかなかったからだ。

「あなたが、死んでしまったのだと誤解してしまったのよ。姉姫であるお嬢さんは、あなたに相談を持ちかけたせいで、あなたが行方知れずになってしまったのではないかと気に病んでいた。あの妹姫は、あなたに助けを求めたがために、あなたまで危険に巻き込んでしまったのだと思いこんでしまった……どちらも間違いではないけれど、結局のところはあなた自身が選択したことだったのだけれど……そうと認めるには、ふたりともまだ幼すぎたし、潔癖すぎたのね。双子の絆がある上に、あなたに対する罪悪感が共鳴しあった結果が、これよ」

ファティ・リンシャが再び指し示したのは、誰が見ても黄神が降臨したとしか思えない、衝撃的な光景で――「結果がこれ」の一言で、到底片付けられることではなかった。

「そ、そこまでわかってらっしゃるのなら、なに暢気に構えてらっしゃるんですか!? 早く……早いとこ、なんとかしなくちゃ、本当にまずいじゃないですか！」

五人の次代柱神候補である斎王全員に会っても、実は特別なにかは感じられなかった。

それはもちろん、若すぎる自分が選定者に選ばれたと知ったとき、試す意味で神殿側が用意した偽の候補者たちを前にしたときとは、全然違う次元での直感だったけれど――はっきり言って、どうあってもそのなかから選べと言われたら、「いないものはいないんです！　それで首切るんなら、どうか切ってくださいー」と言うしかない心境だった。

あのままもし、ユーカリィヤが、双子の妹に関することで、相談を持ちかけてきてくれなか

ったら、きっと自分は「わかりません！　やっぱりわかりません！　わたしが選定者だなんて、絶対絶対間違いだったに違いありません！」と、力一杯主張していたに違いない。

ユーカリィヤに頼まれたことを言い訳に、リオライーシャのことを調べていく内に、ある確信が育って行った。

それは、双子の姉妹だったために、生まれると同時に里子に出されたリオライーシャこそがディエーンの次期柱神に違いない、ということだった。

この光景を目にしたいま、それは最早疑いようがない。

「ナーシア、手を――」

不意に声をかけられ、振り向いたナルレイシアは、考えるより先に右手を差し出していた。

そのてのひらに、ころりと金色のなにかが落とされる。

黄玉を嵌めこんだ、幅広の指輪だった。

（あれ、これってどこかで……）

見たような気が――と、そこまで考えたとき、ナルレイシアはその正体に気づいた。

「黄昏の黄金!?」

柱神を半身とする神宝に違いなかった。

本来、選定者である自分が保管すべきものだったが、守りきる自信がなかったため――盗ま

れでもしたら大変だ。実際一度、神殿から持ち出された過去があるだけに尚更だ——アマンシールに預かってもらっていたのだ。

（それを、なぜファティ・リンシャが……？）

ナルレイシアの疑問を読み取ったのだろう、銀髪の老婦人は、穏やかな笑顔でこう告げた。

「あの竜同様、これも実物ではないわ……いわば、影のようなもの。それでも、混乱しているあの子を落ち着かせることはできるでしょう。届けてあげてちょうだい。そして、笑顔のあの子をわたくしたちのところへ、連れてきて」

お願いね——そう言い置いて、ファティ・リンシャの姿はその場から消えた。

（まさか、まさか、ファティ・リンシャって……）

ある考えがナルレイシアの脳裏をかすめたが、すぐに振り切った。

いま考えなければならないことは——そして、なすべきことは別にあるのだ。

「……黄昏の黄金……」

そっと包みこんで、彼女は指輪にささやきかけた。

「お願い。わたしを、リオライーシャさまのところへ導いて。力の暴走がどんなものかは知らないけれど、あんなに泣いているのを放ってなんかおけないわ」

そうでしょう——と問いかけると、指輪がほんのり熱を帯びたような気がした。

ナサリエル公爵の別邸は、突然庭に出現した竜のせいで、混乱の極みにあった。
「旦那さま、どうかご避難を！」
真っ青な顔で部屋に飛び込んできた家宰に、ナサリエル公爵フィディエールは「落ち着け！」と一喝した。
「幻覚だ！」
このような事態になっても、主人を見捨てようとはしない忠実な家宰は、しかしその言葉を頭から信じることはできないようだった。
「ですが、庭があの、あのように……！」
口に出したことで、恐怖が戻ってきたのか、男はぶるりと身を震わせた。
地は裂け、その奥底から、黄金の竜が姿を現したのだ――虹神の降臨が、そのまま世界の終焉を意味すると伝えられている以上、恐れるなというほうが無理なのだ。
だが、フィディエールにはわかっている――あれは決して本物の黄神などではない。それどころか、実体さえ持たぬものだ。周囲には、とうに消えたと思わせている彼の異能が、それを

告げるのだ。

「落ち着いてよく考えてみろ！　裏庭に面した窓の一枚でも割れたか!?　庭から礫のひとつも飛んできたか!?」

言われて、家宰は息を呑んだ――そう言えば、と言いたげな顔になる。

「多少揺れてはいるが、地震など他国では珍しいものではない。このロスタロイドでも、半世紀に一度ぐらいの割合では起こっている。浮き足立つな。ほかの者にもそう伝えろ」

主人の冷静な言葉に、家宰は「は」とうなずいた。

そのまま出て行こうとする男に、フィディエールはひとつだけ、用事を言いつけた。そうして、扉が閉まると同時に、深々と息をついたのだ。

「まったく……冗談ではない」

深い怒りをたたえた声で、つぶやく。

「竜だと!?　いったいなぜ、あんな馬鹿げた『奇跡』が起きるのだ」

リオライーシャひとりだけを軟禁していた屋敷で、妙な騒ぎが起こったという報告は受けていない。

だとしたら、あの選定者の娘のせいなのだろうか。しかし、古い記録をあたっても、選定者に飛び抜けた異能があるという記述は見あたらない。そんな力があるのなら、むざむざ暗殺さ

れるとも思えないから、やはり歴代の選定者に、特別な力はなかったと判断するしかない。
あの娘が特別なのか。それとも他に要因があるのか。
「あるいは……」
そうつぶやきかけたフィディエールは、突然ある可能性に気づいた。
これまで一度として考えたことのなかったそれは、しかしこの状況を説明するのに、あまりにも填りすぎるものだった。
考える価値はあった。だが、いまは時間が惜しい。
いま必要なことは、選択することだ。ふたつにひとつを——どちらかの命を。
忌々しいことだった。
すべては、あるひとつの決まり事のせいだった。あんな下らない決まりさえなければ、自分がいま、こんなに苦労することはなかったのだ。
異能を持つ者は、王位を継げない——など、馬鹿馬鹿しすぎるというものだ。
そんなことのせいで、先々代国王の直系の孫である自分が、王位から遠ざけられるなど、間違っている。病弱ゆえに立太することはなかったが、父は嫡出の第一王子だったのだ。本来なら自分こそが、王冠に選ばれるべき存在なのだ。
それを——。

かつて、自分に叛意を見抜かれたことを悟り、命を狙ってきた貴族の言葉が甦る。

捕縛されたあの男は、この自分に向かって、許し難い暴言を吐いたのだ。

『貴様など……！　王位に手を伸ばすことさえ許されぬ、異能の落伍者のくせに！』

誰かを、八つ裂きにしても足りないほどに憎悪したのは、あれが初めてのことだった。

その思いは、父も同じだったらしく、問題の貴族は獄中で不審な死を遂げた。

父である先代公爵が、その出自を殊更に誇るような言動を取るようになったのは、思えばそれ以来だったかもしれない。

だが、その父にしても、この下らない決まりについてだけは、仕方ないと諦めていた。

フィディエールには、それがどうにも歯がゆくて仕方なかった。異能とは言うが、それはディエーンそのものを開いた偉大なる始祖の血を、濃く受け継ぐ証ではないか。始祖の揮った奇跡の力を受け継いだ者が、なぜ粗略に扱われなければならないというのか!?

それでも、決まりそのものを覆すことはできなかった。だからフィディエールは、違う方法で、玉座に手を伸ばすことを選んだのだ。

二世紀から三世紀に一度――必ず行われる柱神の交代劇。

その節目の次代に生を受けた幸運を、彼は逃すつもりはなかった。

当代柱神であるアマンシールが、数人の子供を引き取り、王家の養子に迎えたと聞いたと

き、時期が到来したことをフィディエールは悟った。

未だ選定者も決まっていない斎王院への出入りは簡単だった。消失したとはいえ、かつて異能の持ち主であったことが知られるフィディエールは、王位とは無縁の人物として、逆に警戒されなかったのだ。

その事実に歯がみしながら、内心を押し隠し、彼は斎王院に足繁く通った。次代が誰となるのかを見極め、いち早く手を打つためだった。

努力の甲斐あって、ほどなく見つけた。

オースリン侯爵家から迎えられた少女だった。身体が弱いという話だったが、彼女の内側に眠る力は、他の四人を圧倒していた。

次代に選ばれるのは、彼女しかいない。

確信して、フィディエールは動いた。

オースリン家のことを徹底的に調査し、ユーカリィヤに、里子に出された双子の妹がいることを知った。年の差は二十近かったが、貴族の間では珍しくもない組み合わせである。妻に迎えることに否やはなかった。

侯爵夫妻が、その娘を里家から呼び戻そうとした矢先、事故で命を落としたのも幸運だった。自分がその娘を直接保護することで、似たようなことを考える者たちに先んじることがで

きたのだから。

田舎の別荘から逃げ出されたときは、肝を冷やしたが、姉会いたさにロスタロイドに来たところを押さえたから、それはもういい。

残る問題は、この大騒ぎにどう収拾をつけるか、だが——。

なんとかなる、とフィディエールは結論を出した。

ただそのためには、早急にやらなければならないことが、ひとつ残っていた——。

35

残念なことに、目覚めは――爽やかなものとはいかなかった。
夢から現に戻ったナルレイシアが、最初に感じたのは苦痛だったのだ。
（な、なに……息が苦しい……喉が……）
いったい何が起こっているのか――努力して目を開けたナルレイシアは、屋敷内で何度か見かけた庭師とおぼしき老人が、横たわった自分の身体に馬乗りになって、首を絞めているという、衝撃的な現場を目にすることとなったのだ！
「な……!?　は、放し……！」
喉が圧迫されているせいで、うまく声が出せない。
男が、おや、という顔でナルレイシアを見た。
「目が覚めてしまったのか……眠ったままでいた方が楽だったろうに」
何の感情も含まぬ声でそう言うと、男は喉に回した指にいっそうの力をこめてきた。

（じょーだんじゃないわよ！　冥府の門前から、やっと戻ってきたばかりだってのに、とんぼ返りしてたまるものですか！）

そう思い、必死に男を押しのけようとするが、体勢が悪い上に、体格差もあってうまくいかない。

（だいたい、なんでわたしが殺されなくちゃならないのよっ!?）

声には出せなかったが、彼女の表情から疑問を読み取ったのだろう、男がにやりと笑った。絶対的優位を確信しているらしい男は、残酷な思いやりを施す気になったらしい。

「それは、お前が魔女だからだよ。あんな恐ろしい幻を操って、旦那さまを陥れようなど許し難い所行だ」

恐ろしい幻――というのは、夢のなかでファティ・リンシャに見せられた黄金の竜の姿のことだろう。

だが、神に誓って、あれは自分のやったことではない。

「ち、違……」

訴えようとするが、男は聞く耳を持たなかった。

「違わない！」

言い切り、男は冷ややかな目で、ナルレイシアを見下ろした。

「違わないんだ。お前は悪い魔女なんだ。旦那さまが、せっかく、最高の花嫁御寮をお迎えになったというのに……それを邪魔して、旦那さまに悪い噂が立つような騒ぎを起こすだなんて……魔女以外の何物でもないじゃないか。わしは、命をかけてもお前の悪しき企みを挫いてみせるぞ。お前さえ死ねば、あの幻は消えるんだと、わしはちゃんと知ってるんだ！」

老人の目はらんらんとした光を放っており、その本気を伝えてくる。

（どこの誰よ、そんなでたらめ吹き込んだのは！）

大声でそう叫びたかった――けれど、声が……出ない。

（だいたい、わたしが死んだところで、あれが消えるわけがないじゃない……あれは）

リオライーシャの力の暴走が招いた幻影なのだから。

けれど、そのことに、ナルレイシアは引っかかるものを感じた。ファティ・リンシャはあの竜を影のようなものだと言った。老人もあれは幻だと断言した。

けれど、現実に大地は揺れているではないか!?

泣いていたリオライーシャの内なる力は、この地震を招いたのではないのか!?

ざあっ、と顔から血の気が引いた。

大地を震わせる――そこにはどれほど強大な力が必要とされるだろう。あの小さな身体で、そんな力を揮いつづけたら……っっ！

（きっと、無事にはすまない）

思った瞬間、夢のなかで握りしめた指輪が、かっと熱を帯びた。

「放し……てっ！」

老人の眼前に右手をかざし、そう叫んだ。

ばしり、と指先に痺れが走った。冬の乾燥した日など、金属に触れたときに感じるそれと似ていた。

てのひら全体が一瞬熱を帯び、そうして次の瞬間、そこから金色の火花が散った！

「うわあぁぁっ！」

顔面になんらかの衝撃を受けたらしい老人の身体が、宙を舞い、壁に叩きつけられる！

げほごほと咳き込みながら、寝台から起き上がったナルレイシアは、再び襲われた時のことを考え、手近に武器となるものがないかと探したが——それはどうやら必要なかったようだ。

老人は、壁にもたれかかるようにして、がっくりと首を垂れていたのだ。

意識を失っているように見えた。

（だけど、そう見せかけてるだけかもしれない。油断は禁物だわ）

と、ナルレイシアは自分に言い聞かせた。

迂闊に近づいて、みすみす反撃の機会を与えてはならない。相手は老人とはいえ、日頃力仕

事に従事している男なのだ。実際、首を絞める指の力はすごかった。力勝負ではかないそうにない。

背中を見せないように、そろり、そろりと彼女は扉に移動する。幸い、扉は半ば開いていたので、鍵の心配はしなくてすんだ。

追いかけて来られるかもしれないと思うと、外から鍵をかけておきたかったけれど、手元に鍵がない以上、贅沢は言っていられなかった。

いまは一刻も早く、リオライーシャのもとへたどり着かねばならないのだ。

リオライーシャの力の暴走を鎮めるために！

そんな彼女の思いに呼応するように、右のてのひらが微かに熱くなった。

「あ、そうだ、指輪！　黄昏の黄金！」

夢のなかで、しっかりと握りしめたはずの指輪だが、目覚めたときの、それどころでない事態のせいで、すっかり忘れていたのだ。

「そう言えば、手をかざした時に、指開いちゃったし……ええっと、もしかして、あの部屋に落として来ちゃった!?」

慌てて背後を振り返ったナルレイシアは、しかしすぐに妙なことに気がついた。

右のてのひらが、また熱くなったのだ。しかも、何事かと目を向けると……あろうことかな

かろうことか、彼女の右手が、金色に発光していた。

「うそ……なに……？」

こんな特技は取得した覚えがないけれど――と思いながら、てのひらを見てみると、そこには記憶にない痣が顕れていた。

金色の、丸い輪の形をした痣だ。

（うーん。普通じゃ考えられないことだけど……でも、そもそもこの状況自体、普通じゃないし）

なにより、夢のなかで手渡されたものだ。

指輪が、指輪の形の痣に変わることぐらい、大したことではない――かもしれない。

（考えてみたら、実物だったらさっき心配したみたいに、落とす可能性だってあるんだし、実物がてのひらにぺったり張り付いて取れないってのも、昔話に出てくる呪いかなにかみたいで気持ちよくないし……それぐらいなら、こっちの方がましってものよね）

そうして、先ほど老人を弾き飛ばしてくれた力の正体に思い至る。

（もしかして……いいえ、もしかしなくても、だわ）

右手を見つめながら、彼女は礼を言った。

「さっきは助けてくれたのよね、ありがとう」

今度は、てのひらが熱くなることはなかった。
代わりに、痣が眩しいまでの輝きを放ったのだ――まるで、どういたしまして、とでも言うように。
急に胸が熱くなった。
（そうよ……わたしは、ひとりきりなんかじゃない）
黄昏の黄金――の影――がいてくれる。
ガスカールもきっと、すぐに来てくれる――これだけの騒ぎなのだ、彼が気づかないはずがない。
昂然と顔を上げ、彼女は力強く宣言した。
「さあ、行きましょう！　リオライーシャさまを見つけて、そうしてみんなで帰るのよ！」

どくん、どくんと、胸が痛いほどに脈打つ。
痛い、苦しい、痛い、苦しい――。
けれど、どうやったらこの痛みを止められるのか、わからない。

痛い、痛い、痛い、痛い――。

この痛み、苦しみには覚えがあった。

夢のなかでしか会ったことのないユーリが、ときどきこんな風な痛みを抱えて苦しんでいたのだ。

身体が弱くて、ことあるごとに熱を出していたユーリ。我慢していれば、その内治まるから大丈夫だと言っていたユーリ。

こんなにも酷い痛みに、彼女はずっと耐えつづけてきたのだろうか。

胸を押しつぶされるような、こんな苦しみに。

「あ、あぁ……」

両手を胸に当てながら、リオライーシャは苦悶の呻きを洩らした。

あのお姉さんが死んだと知ったとき、堪えきれなくなってリオライーシャは悲鳴を上げた。

涙が溢れて止まらなくなって、その後はただ泣きつづけた。

心の内側にある、なにかが破裂したような気がしたけれど、後悔と絶望が大きすぎて、気にとめもしなかった。

泣いて、泣いて、泣きつづけて――そうしている内に、身体が重くなったけれど、涙も嗚咽も止まらなかった。いや、止められなくなっていたのだ。

涙や鳴咽と一緒に、心の内側からなにかが溢れ出して、それを止めることができない。
それが力そのものだということを――次代の柱神に選ばれるほどに圧倒的な、彼女に内在する力であることを、リオライーシャは知らない。
しかし、意識よりも身体のほうが、その意味を知っていた。
大きすぎる力の放出に、心臓が悲鳴を上げたのだ。
「あ、ああぁっっ！」
激しい痛みに、身体を支えることもできずに、リオライーシャは床に倒れこんだ。
（お姉さん……お姉さん。あたしのせいで……ごめんなさい。ユーリ、教えて。どうやったら、こんな痛みを我慢することができるの？　ああ、でも我慢してたら治まるのは、ユーリがいい子だからなのかもしれない。あたしは、悪い子だから……お姉さんを巻き込んで、死なせてしまった悪い子だから……）
いくら我慢しても、痛みは消えないのかもしれない。
痛いまま、苦しいまま、死んでしまうのかもしれない。
（悪い子には神さまの罰が当たるって、田舎のお母さんも言ってたっけ……）
だったら、これは悪い子である自分に下された神様の罰なのだ――きっと。
（死んじゃうんだ……あたし）

ユーカリィヤに――あれほど会いたいと願った双子の姉の顔を見ることもできないまま。
（ああ、でも死んだら、お姉さんに直接謝ることができる……怒って口をきいてくれないかもしれないけど、許してもらえるまで、何度も何度でも謝らなくっちゃ……）
そう思うと、死ぬのが少しだけ怖くなくなった。
（あと、死んだらお屋敷のお父さんやお母さんにも会えるだろうし……）
悪いことばかりではないのだ。
「ユー……リ……」
双子の姉の名をつぶやいて、リオライーシャは静かに目を閉じ――ようとした。
耳元に、やさしいささやきが届いたのはそのときだった。
『いいえ、リオ、いいえ。勘違いしてはいけないわ。冥府にナーシアはいないし、あなたの実のご両親も、こんなに早く、あなたにそばに来て欲しいとは思ってらっしゃらないわ』
半ば霧のかかったような視界のなか、白い繊手が、なにかを指し示すかのように動いた。
つられたように、そちらに目を向けたリオライーシャは、白い霧の向こうから、金色の光に包まれたひとが、近づいてくるのを見た。
ひとり……いや、違う。ふたり、いる。
とても大切で、かけがえのない人たち。

ふたりとも、顔はよく見えないのに、必死に駆け寄ってきてくれるのがわかった。そして、その内のひとりの声を耳にした瞬間、リオライーシャはあの『声』の言っていたことが嘘でなかったことを知った。

「リオライーシャさま！」

（ああ……お姉さんの声だ……）

良かった。本当に生きていた。

（でも、顔がよく見えない……）

震える手をのばして、お姉さんの顔に触れてみた。

温かかった——指を濡らしているのは、きっと涙だ。

「お姉さん……ごめ……な、さ……」

「リオライーシャさまに謝っていただくようなことは、なにひとつありません！　リオライーシャさまは、謝ることなんてないんです！」

はっきりきっぱり言い切る声は——なんだか怒っているように聞こえた。

けれど、それが自分に向けられたものではないことが、なんとなくわかったから、ほっと息をついた。

自分の身体を抱きかかえてくれているお姉さんの両手から、やさしくて気持ちのいい風が流

れ込んでくる。
特に右手からは、お姉さんを包んでいた光そのもののような、金色の温もりが伝わってきて、先ほどまでとは全然違う意味で泣きたくなった。
大丈夫――もう大丈夫。
安堵の息をつき、リオライーシャはふわりとその意識を手放した――。

「……日に二度も冥府を訪ねさせるだなんて、この老体をずいぶんこき使ってくれること」
魔法屋敷の一室――椅子の背に身体を預けた格好で、銀髪の老婦人は、疲れを隠しきれない顔のまま頼み事をしてきた半透けの男性を軽くねめつけた。
「申し訳ありません。わたしが赴いた場合、そのまま引き留められる可能性が高かったものですから」
苦笑まじりに言い訳を口にするのは、彼女より年若いこの国の柱神だった。
「わたくしだって、引き留められましたとも。そろそろこちらに来てもいいだろうと……二度目などは、境界ぎりぎりのところをかすめただけでしたのに、しつこいこと、しつこいこと。

もう、当分はご免だわ」

「当分、ですか……」

目の前の女性が、現在存命中の全柱神のなかで、最も長寿……もとい、多くの経験を積んだ存在であることを知るアマンシールは、少しばかり複雑な顔になった。

通常の柱神の二倍以上の時を生きているこの女性にとっての『当分』とは、いったいどれぐらいの時間を指すのだろうか——とは思ったが、そうしたことを口に出さないだけの思慮は持っていた。

「では、後は彼らに任せて大丈夫そうですね」

アマンシールの声には、深い安堵の響きが宿っていた。

かつて、彼が次代として選ばれたとき、王家もまた交代し、多くの血が流された。二度と同じことは繰り返させないと思い、さまざまな手を打ってはきたが、何事もうまく運ぶわけではない。

斎王院の仕組みについては、もっと考える必要があるだろう。

だが、取りあえず、今回の継承は無事にすみそうだ——もちろん、最後まで気は抜けないが、俗世との関わりを禁じられた自分たちには、これ以上できることはない。

(カール、ナーシャ嬢……みな、どうか無事で……)

神と見なされながら、神ならぬ身であることを知る彼は、至高の神々に、大切な者たちへの加護を願い、祈った――。

36

黄昏の黄金に導かれるまま、屋敷内の廊下を全力疾走して、リオライーシャが幽閉されていると思われる部屋の近くまで来たとき、ナルレイシアは異様な状況に気がついた。

家宰と名乗ったあの男が、部屋の扉にあと数歩というところで立ち止まり、なにもない空間にこぶしをたたきつけていたのだ。

（結界……？）

あの東方人の男の仕業だろうか――ちらりと浮かんだ考えを、彼女は即座に打ち消した。

公爵に雇われた結界術師が、公爵家の家人を足止めするような結界を張るわけがない。

だとしたら、あれは、あの男を近づかせたくない何者かが作ったものだ。

目をこらして見ると、男が叩いている見えない壁は、ほのかに金に輝いている。間違いなかった――リオライーシャの暴走した力の一部が、結界を張ったのだ。

じくり、と右手が熱を帯びた。さきほど感じた温もりに満ちたものではない、なにか良くな

い感じの熱だった。
（右手から、黄昏の黄金の感情が伝わってくる……これは、不安？　焦燥（しょうそう）……そして）
かけがえのない半身を失うことに対する恐怖――。
リオライーシャの限界が近いのだ！
あれこれ考えている暇はなかった。
「退きなさい！」
叫びながら突進した。
気づいた家宰が、「お前は!?」と叫んだが、彼女の右手から放たれた光弾に吹き飛ばされ、壁にたたきつけられると――気絶したのだろう――おとなしくなった。
安否（あんぴ）が気遣われる相手は別にいるので、ナルレイシアは構わず扉に駆け寄った。
そんなことではないかと、思ってはいたが……果たして、扉には外側から鍵（かぎ）がかけられていた。恐らく中からはかけられないのだ。
「最低ね！」
憤然（ふんぜん）として、ナルレイシアは鍵穴の部分に右手を当てた。
鍵でも結界でも、壊せる自信があった。リオライーシャを案じる黄昏の黄金が、自分たちを隔（へだ）てるそんなものを、許すはずがないからだ。

ばしり、と火花が散り、取っ手ごと鍵の壊れた扉が、内側に向かって開く。

「リオライーシャさま！」

少女の名を呼びながら、部屋に飛び込んだナルレイシアは、薄暗い部屋の隅に揺らめく金色の陽炎に気づき、息を呑んだ。

リオライーシャが、倒れていたのだ。

（まさか……いいえ、いいえ！　そんなはずがない……あってたまるものですか！）

わき上がる不安を振り払って、彼女は少女に駆け寄った。

小さな身体からは、熱が失われかけていた――「駄目よ、そんなの駄目」繰り返しながら、彼女は血の気を失った少女の頬に、右手で触れた。

黄昏の黄金を、半身である少女に渡すために――そこに宿る力が、彼女を癒してくれるに違いないと信じて。

神宝は――正確にはその影だが――ナルレイシアの期待を裏切らなかった。

安堵のあまりか、意識を手放した少女の身体を抱きしめながら、ナルレイシアはささやきかけた。

「一緒に帰りましょう、リオライーシャさま。ユーカリィヤさまも待っておいでですよ」

鏡や夢のなかでしか、互いに触れあうことが許されなかった双子の姉妹――。

けれど、もうこれからは――。
そう思った瞬間だった、背後から、冷たい刃が首筋にあてがわれたのは。
「それは、困る」
一度だけ、聞いたことのある声だった。
振り返るまでもなく、ナルレイシアはそれが誰なのか、わかっていた。
二度までもリオライーシャを攫い、玉座への野心のために、道具にしようと企んだ男だ。
「ナサリエル公爵……」
背後で、くつり、と喉を鳴らす気配がした。
「やはり、気づいていたか」
氷のように冷ややかな声が、事実を認めた。
驚愕も後悔も恐怖も――感じたのは数瞬のことだった。
必要なことだけが、胸のなかに残る。
そう……腕のなかの少女を守るための。

「――振り返っても？」

自分でも感心するぐらい、落ち着いた声で、ナルレイシアは尋ねた。

「うん？」

意外に思ったのか、それとも興がってか、公爵はすぐには言葉を返さなかった。

ややあって、聞こえてきたのは、

「よかろう。わたしも、一度ぐらいは選定者殿の目を見ておきたいからね」

というもの。

どうやら自分を生かして帰すつもりはないらしい、とナルレイシアは判断した――事態の真相を知る唯一の証人なのだから、当然と言えば当然かもしれないが。

（だからって、諦めないけどね）

胸中でこっそりつぶやくと、彼女はリオライーシャの身体をそっと床に横たえた後、刃で傷つかないよう、少しだけ身体をずらしてから振り返った。

いざというとき、すぐに少女を庇えるように、立ち上がることはしなかった。戦う必要が生じた場合、不利なことはわかっていたが、立ったところで体格が違いすぎる。足払いをかけられ、倒れた隙にリオライーシャを奪われては目も当てられない。

しかし、彼女のその姿を、ナサリエル公爵フィディエールは違う意味に取ったらしい。

彼女を見下ろす朽ち葉色の双眸に、満足げな色が宿った。
「文字も満足に書けない無学な娘だと思っていたが、多少は高貴なる身分に対する礼儀はわきまえているようだな」
（なんですってぇっっ！）
怒りのあまり、つい立ち上がりそうになったナルレイシアである。
しかし、公爵の思いこみは、自分がそう仕向けた結果なのだから、と必死に怒りを抑えた。
彼女がわざと、家宰の目に触れさせた書き付けは、実は故郷の師匠から教えてもらった速記文字だった。一般に広まっている速記文字と違い、一見文字の羅列に見えるため、綴り間違いの多い悪筆と思われる、便利だが誤解を招きやすいものなのだ。
（平常心、平常心。こっちの狙いがばれなかっただけ、御の字だと思わなくっちゃ）
一所懸命、自らに言い聞かせ、ナルレイシアは無言を通した。
しかしフィディエールは、その沈黙になんら関心を抱かなかったようだ。
じろじろと、不躾に彼女の顔を見つめた後、小さく肩をすくめた。
「あの木石が昼夜を問わず、そばに張り付いて守っているというから、どれほどの大輪の花の蕾かと思っていたが……目が開いていても、それらしくはないな。だが、まあ……我が婚約者殿の暴走を止めてくれたことに関しては、礼を言ってもいい。あの迷信深い庭師が、きちんと

役目を果たし、神宝が手に入っていたら、わたしがその役を果たしたんだがね」

台詞の前半は意味不明だったが、後半は——とんでもなかった。

「やっぱり、あのお爺さんを差し向けたのは、あなただったのね」

その目的がふたつあったことも、いま、わかった。

フィディエールは、ナルレイシアが神宝である『黄昏の黄金』を、密かに隠し持っていたと思っているのだ。だから、眠ったままの自分を殺させ、その後で神宝を奪い取ろうと企んだのだ。

直接手を下そうとしなかったのは、自らの手を汚すのを厭ってのことか、それとも、神に選ばれたという選定者を手にかけることで、万が一にも神罰が下ることを恐れたがゆえのことなのか——。

どちらにしても、いやらしい性根だと思った。

(ひとのこと、頭っから見下して、山猿扱いするあたりは似てるけど、どんなに不本意でも通すべき筋は通して、約束も守って、なによりひとを物とか駒扱いしないだけ、ガスカールの方が数段上等な人間だわ!)

当人が聞いてありがたく思うかどうかは別として、ナルレイシアのなかで、ガスカールの株が上がった瞬間だった。

ナルレイシアの胸中も知らず――知ったら激怒したに違いないが――フィディエールは恥じ入るどころか、胸を張った。

「人聞きの悪い。迷信深く、あの幻影を目の当たりにして自ら命を絶とうとしていた哀れな老人に、わたしはその真実を教えてやっただけだよ。世界の終焉など来ない、とね」

そして、同時にささやいたのだ――あの幻影は魔女が、この屋敷の主である自分を陥れるために作り出したのだと。

目に見えるようだった。

この男は、恐らく自分以外の人間を、敵か駒としか思っていないのだ。

自分以外に、大切な存在を持っていないのだ。

哀れなのかもしれない。だが、それは男が自ら選んだ道だ。

（だいたい、のんびり同情できるような状況じゃないし……）

命の危険に晒されているのは、フィディエールではなく自分の方なのだから！

「あー、それで、この先どうなさるおつもりなんでしょう？」

厭味をこめて、敢えて敬語を用いたナルレイシアだったが、その作戦は不発に終わる。

敬語を用いられるのが当然だと思っているナサリエル公爵にとって、厭味が厭味として通じなかったのだ。

「多少の聡明さは持ち合わせていると見直したところだったのに、失望させないでほしいね、選定者殿。婚約者殿が縁者ではなく次代さまだったことは驚くべき誤算だったが、わたしにとっては逆に幸いだ。柱神の縁者やその伴侶というより、柱神そのひとの伴侶であるほうが、支持は集めやすいだろうしね」

はなっから、リオライーシャの意志は無視、だ。

「もちろん、そのためにも、君が持っている神宝は、是非とも必要だ。渡したまえ、そもそもそれはわたしの元に来るはずのものだったのだから」

新事実、さらに発覚――ナルレイシアがロスタロイドに入って間もなく、酔漢にぶつかられ、その際故意か偶然かで、彼女の荷物に入り込んでしまった『黄金の黄昏』は、どうやら彼の命で神殿から盗み出されたものらしい。

目的は――多分時間稼ぎだ。

名実ともにリオライーシャを妻とするまで、次代柱神の決定を遅らせようとしたのだろう。選定者が現れたとしても、次代柱神を実際に選ぶのは、その運命の半身となる神宝なのだ。選定者は神宝の声を、望みを正しく聞き取り、選ばれた人物を正確に見極めるのが役目。

神宝そのものがなければ、選定者に意味はないのだ。

リオライーシャを妻に迎えた後に、神殿側にそれとなく情報を流し、神宝を発見させようと

いう魂胆だったに違いない。その頃であれば、次代柱神の最も近い肉親の伴侶という席には、彼自身がついているのだから。

そして、いまこのときでさえ、フィディエールはその未来図を現実にする気満々でいるのだ。

「持っていない、と言ったら？」

信じないだろうとは思ったが、やはり相手は信じる気皆無な態度で、ふん、と鼻を鳴らした。

「馬鹿なことを。過去の文献には、神宝は選定者に保管されたとあった。例外はない。なにより、その娘が力を暴走させ、あれほどの力を発揮したのがいい証拠というものだ。いくら次代の柱神の候補でも、そばに半身たる神宝がなければ、あんな途方もない奇跡は起こせない！」

確信に満ちた声で主張するだけのことはあって、調べたというその内容は、確かに確かなものだった。

実際のところは、微妙にあれこれ違っていたが、それらが微妙に絡み合って、結果として文献に残る記述と類似した事態が発生した――というところなのだが。

ナルレイシアは、内心、ちっと舌打ちした。

（なーんで、そういうとこだけしっかりきっぱり調べちゃうかな）

これでは、下手なごまかしがきかないではないか。

仕方ないので、彼女は事実の一部を明かすことにした。

（平常心、平常心、平常心……大丈夫。きっと来てくれる。わたしがとことんまで頑張ったら……頑張りがきかなくなる前に、きっと来てくれる。だから、出来る限り、わたしは頑張らなくちゃ）

事実、背後には意識を失ったままのリオライーシャがいるのだ。

なにがなんでも、守らなければならない。

「その過去の前例から、学んだんじゃありませんか？　わたしは、神宝だっていう指輪、見せてもらったことはありますけど、持ってなさいとは言われませんでした。盗まれかけたことがあったのも理由になってか、保管させるのは不安過ぎるとか言われちゃって……結局、その指輪の影とかいうのだけが、わたしに封じられたのだと聞いてます。リオライーシャさまと共鳴を起こしたのは、その影だとか言う部分じゃないんですか？」

その言葉を、フィディエールが信じたのかどうか――ややあって、彼の口から紡がれた返事は、判断材料とするには微妙なものだった。

「……君を無力化してから、検めるという方法もあるのだが？」

単に意識を奪うという意味の無力化か、後腐れなくおとなしくさせてしまうというそれか

――二通りあるのが厄介だった。

フィディエールとしては、神宝そのものなら、是非とも欲しいところだろう。そうすれば、知りすぎた選定者は始末して、当初の予定通り、次の選定者が出現するのを待てばいいだけのことなのだから。この期に及んでも、リオライーシャを妻に迎えるつもりでいるあたり、呆れるばかりだが、彼にはそもそも彼女の意志を認めるつもりがない。いざとなったら力ずくで、ことを運ぶつもりなのだろう。

（そんなことは、させないわ……でも、どうしたら……？）

ナルレイシアは必死に頭を働かせた。

フィディエールに自分を助ける気がないのは明白だ。時間を稼ぐためなら、命乞いぐらいやる覚悟はあるが、そうした場合、切り上げる権利を彼に与えることになる。

必要なのは、彼にそうと気取らせずに時間を割かせることだ――そう、餌をちらつかせてでも。

「そうなさりたいのなら……影は影であり、実体はないと聞かされましたから、わたしがどのような形で保管しているのか、わたし自身存じませんので、ご協力はできませんが」

ナルレイシアの淡々とした返答に、フィディエールは鼻白んだ。

怯えて白状するに違いないとでも思っていたのだろう。

（お生憎さま）

内心舌を出しながら、彼女はじっと男を見上げた。

そんな態度もまた、気にくわないのだろう、フィディエールは忌々しげに舌打ちした。下位と見なした相手が、自分に対して譲らぬ態度を取ることに、彼は慣れていないのだ。

「神の権威を借りて奢るか」

憎々しげな口調には、紛れもない憎悪が宿っていた。

一方ナルレイシアはといえば、思いがけない相手の反応に内心焦っていた。

（格下の相手にちょっと刃向かわれたからって、ここまでキれる!?　心狭すぎっっ！）

かと言って、いまさら下手に出ても効果があるかどうかはわからない。

「奢ってなどいません。選定者だと告げられたとき、わたしは神宝の意を汲み取り、正しき御方を神座に導くための標で、それ以上の意味も権威もないのだと、最高祠祭さまに言われました。その通りだと思ってます」

選定者であろうがなかろうが、自分がナルレイシア・フォイリリル・ダカールであることに変わりはないのだから。

（あ、でも、選定者にならなかったら、アマンシールさまや斎王の方々と知り合うことはなかったんだっけ）

しかし、目前の男は、彼女の言葉を、やはり自分に都合よく解釈したようだった。
「よく言った。ならば、お前が仕えるべき次代の伴侶に、同様の忠誠を示すがいい」
（ほんっとうに、こいつってば、ひとの話聞いてないし……）
師匠から聞いていた、貴族にありがちな馬鹿の分類上、最悪にして質も悪い馬鹿に属する相手だった。
（選定者は次代柱神を見極めるだけだって、言ってるじゃないの。なんで、そこで仕えるとかいう言葉が出てくるわけ!?　万一そういう解釈があるとしても、その対象は次代さま限定で、その家族とか親戚とか伴侶とかは関係ないんだってこと、どうしてわからないかなー）
はっきり言って、話が通じなさすぎる。
しかし、先ほどのことがある――勝手にキれられては堪らない。
「……そんなことを言われても、本当にわたしに委ねられたのは、神宝の影に過ぎないもので……」
「なら、実物の神宝はどこにある？」
苛立ちのあまりか、フィディエールの持つ剣の切っ先は、再びナルレイシアの喉元につきつけられていた。
（ここで、完全に白を切ったら、多分怒りのままに首斬っちゃうんだろうな、このひと）

いかに十六年しか積んでいない人生経験でも、ここまで鬼気迫る様子を目の当たりにしたら、相手が本気かそうでないかぐらいのことはわかるものだ。

とは言っても、正直に話したところで、きっと結果は同じなのだ——いかに王族の一員と言えど、当代柱神であるアマンシールの元から、神宝を盗み出すことなど不可能なのだから。

（んーと）

さて、どう言い抜けるかと、ナルレイシアが頭を絞って考え始めたときのこと——。

部屋の外から、切迫した声が飛んできたのだ。

「殿！　殿！　ご避難をっっ！」

フィディエールの意識が、一瞬ナルレイシアから逸れた。

（いましか、ない！）

直感して、彼女は突き進んだ。

両手を広げ、フィディエールの両膝を抱えこみ、力の限りをこめて——体当たりしたのである！

37

膝を狙ったのは正解だったらしい。
不意打ちだったのも勝因のひとつだろうが、ナルレイシアの体当たりを受けて、フィディエールの身体は後ろに倒れこんだ。
（今の内、今の内、今の内にっっっ！）
フィディエールの持つ剣を奪うため、ナルレイシアは必死にその手にとりすがった。
王族の一員であり、無駄に矜持だけは高い公爵は、自分の身に何が起こったのか、まだ理解できていない様子だ。
（もうちょっと、茫然自失しといてっっ！　お願いだから！）
倫理的にも文法的にもどうかと思われるようなことを胸中で繰り返しながら、ナルレイシアはひたすらに彼の剣を奪うことに集中していた。
護身術程度の嗜みしかないナルレイシアが、剣を奪ったところでさほどの脅威とはなり得な

い。それでも、自分と、気を失ったままのリオライーシャを守るための時間を稼ぐための重要な武器とはなり得るのだ。

同時に、直接的な脅威も——あくまで、その場しのぎに過ぎないが——遠ざけることができる。

一石二鳥……というか、負けたら後のない勝負だった。

なにがなんでも勝たなければならない。

(ああ、もう、結構な力で握ってくれちゃって……)

こんなことなら、指に力が入らなくなるツボを、師匠に習っておくのだった——と後悔したが、いまさらである。

(せめて、あと一本指を外せたら……)

奪えるのに——と思ったとき、我に返ったらしいフィディエールが反撃してきた。

「この……無礼者がっ!」

怒鳴りつけるなり、剣の柄をナルレイシアの頭部に叩きつけたのだ。

「きゃあっ!」

悲鳴を上げて、彼女は床に倒れこんだ。

打たれたこめかみが、ずきずきと痛んだ。思わず手を当てると、指先に生暖かいものが触れ

る——出血したのだ。

（いけない、リオライーシャさま……っ！）

弾き飛ばされてしまったため、フィディエールとリオライーシャの間から、外れてしまった。

意識のない少女が、逃げられるはずもない。

慌てて、立ち上がり、駆け寄ろうとしたナルレイシアは、眼前に突きつけられた剣のため、動きを封じられた。

「卑賤の身で、よくもわたしを謀ってくれたな！　本来なら、生きながら千々に引き裂いてやるところだが、残念ながら時間がない。神宝のことは惜しいが、その娘さえ押さえておけば問題はないしな」

彼女を見下ろす双眸は、憎悪と殺意に彩られていた。

「お前には、この屋敷をくれてやろう……欲に迷い、金目当てに次代さまの情報を売りつけにやってきた選定者になら、神罰が下ってもおかしくはないからな。卑賤の身には、過ぎた墓所だろう？」

男の言い分は、どこまでも身勝手だった。

しかし、先ほど現れた竜の姿を目にした者なら、その屋敷で選定者が死んでいたと聞けば、

フィディエールの言うとおり、神罰が下された相手が彼女だと思ってもおかしくはない。もっとも、その死因が刀傷では説得力には欠けるはずだが。

（そういえば……）

ナルレイシアは、フィディエールが隙を見せる原因となった声を思い出した。

『ご避難を！』

の前に、なにか言ってはいなかっただろうか。

（確か……そうだわ、すぐに火が回ります、とか言ってなかった……!?）

得心がいった——彼は、自分を斬り殺した後、その死因を火事で隠してしまうつもりなのだ！

恐らく竜騒ぎが起こったときに、すでに算段をつけていたのだ。ついでに、知りすぎている上に邪魔でしかなくなった自分に、背神者の罪を着せることで、我が身を汚名から守る気なのに違いない。

全てが解けた。

だが、残念ながら、それらはこの絶体絶命の危機を逃れるのに、なんの役にも立たないのだ。

稼ぐ時間は残されていない。一度きりの不意打ちも失敗に終わった。

万事休す――だ。

（……もうっっ！　なにやってんのよ、あの男は!?　いくら人間的にはこいつより数段上でも、無能じゃ話にならないじゃないのーっっ！）

本当は、大声で喚きたかったが、そんなことをしたら、目の前の男に「卑賤の小娘はさすがに見苦しい」とかなんとか言われるのはわかりきっていたため、ぎゅっ、と唇を噛みしめた。

「覚悟を決めたか」

やはり、どこまでも自分の尺度でしか、物事をはかれない男は、勝手に納得して剣を振り上げた。

（殺されるっっ！）

確信したナルレイシアは、思わず心の内をさらけ出す言葉を叫んだ。

「ガスカールの馬鹿ーっっ！　愚図、ノロマ、役立たずっっっ！」

次の瞬間、命を奪う痛みに襲われることを、信じて疑わなかったナルレイシアは――咄嗟に目を閉じ、そのときを覚悟した。

が。

いくら待っても、衝撃も痛みも訪れはしなかった。

（え……？）

恐る恐る目を開けたナルレイシアが見たのは、自分ではなく扉のほうを振り返るフィディエールの姿で……つられてそちらに目をやったら。

全身を紅く染めた、黒髪に紫の瞳を持つ公爵(こうしゃく)が、肩で息をつきながら近づいてくるのを、見つけた。

「……ガスカール……？」

早く来い、さっさと来い、遅すぎる――等々、内心ではさんざん罵倒(ばとう)していたものの、本当にその姿を目にした今、信じられないような、泣きたいような、どう表現していいのかわからない感情の嵐に襲われて、ナルレイシアはそれ以上、なにも言えなくなった。

間一髪(かんいっぱつ)だった。

竜騒ぎが起こったおかげで、狙いをつけた三家中、黒いのはナサリエル家で、どう考えても問題の山猿娘がいるのはその騒ぎの中心である屋敷に違いないと、スカルトードに先んじて駆けつけたガスカールだったが、屋敷の家人――と言うよりは用心棒だろうか――のしつこい抵抗には手こずらされた。

退けば罪には問わないと言ったにも拘わらず、ほとんど問答無用で斬りつけられ、応戦せざるを得なかった。しかも途中で煙が出ていることに気づき、焦った。

屋敷の主が証拠隠滅のために屋敷に火をかけたのは明白で、その場合、捕らわれているであろうナルレイシアの口が封じられるのは確実だと思ったからだ。

ただでさえ気が急いて仕方がなかったというのに、通りかかった部屋のなかから、女性や老人と思われる声が聞こえてきたときにはため息が出た。

アマンシールとファティ・リンシャというふたりの養い親から、ガスカールは「命の危険にさらされているひとを、見殺しにしてはいけない」という教えをたたき込まれていた。もちろん最終的に優先すべきは自分の命だとしても、「余力があるなら助けなさい」とアマンシールに、「情けはひとのためならず、ですよ」とファティ・リンシャから言い聞かされた。

いまでこそ、それが人間としての最低限の良識だとわかるが、彼らに引き取られたころは、世界中が敵にしか見えていなかったので、教えを無理なく実践できるようになるまでは時間がかかった。

これは、無視しても責められるようなことではない——とは思ったものの、結局ガスカールは、外側から施錠された扉を壊し、解放した屋敷の使用人に、各所で上がっている火の手を消すよう頼み置いて、先に進んだのだ。

ナルレイシアがいるはずの部屋には、意識を失った老人が壁によりかかっているばかり。
どうやら自力で脱出を試みたらしいのだが、ガスカールとしては腹立たしいことだった。
（どうして、あの山猿は、おとなしく助けを待っていられないのだ!?　普通、婦女子とは、もっと儚く大人しく、慎ましいものだろうに！　おかげで、またあちこち探し回らねばならなくなったではないか！）
心配するがゆえの焦燥を怒りにすり替えて、ガスカールはナルレイシアの足取りを追った。
そうして、ようやく見つけたその時――。
彼女の正面には、その命を絶つための剣を持つ男がいた。
見知った顔だった。
先々代国王の直系の孫にして、現ナサリエル公爵――。
考えるより先に、彼は持っていた剣を、投げつけていた。
よりにもよって、その瞬間に、人に気苦労ばかりをかける山猿娘が叫んだのだ。
『ガスカールの馬鹿ーっっ！　愚図、ノロマ、役立たずっっっ！』
と――。
「お前にだけは、言われたくない」
苦虫を十匹ぐらい噛みつぶしたような顔で、ガスカールはぼそりとつぶやいた。

ナルレイシアの耳に届いたかどうかは……多分、きっと、神しか知らない。

「……貴様……」

憎悪も露わに、ガスカールを睨みつけるフィディエールの右手に剣はなく、その腕から血が流れていることに遅まきながら気づいたナルレイシアは、命の恩人が誰であるのかを知った。

（目を瞑ってたせいで見なかったけど……ガスカールが助けてくれたんだわ。なのに、わたしったらあんなこと叫んで……）

穴があったら入りたいとは、まさにこのことだった。

けれど手近に穴などなかったし、掘っている場合でもないことを思い出す。

「リオライーシャさま！」

叫びながら、少女に駆け寄り、今度こそしっかりと、その身体を抱きしめた。

その様子に気づいたのか、フィディエールが忌々しげに舌打ちしたが、すぐにその目はガスカールに向けられた。

「先の王家の血を色濃く引く呪い子が、この屋敷に何の用だ？　当代さまに可愛がられていい

気になっているようだが、ここは貴様のようなやつが足を踏み入れていい場所ではないぞ」

嘲りも露わなその声には、相手の心を傷つける意図が宿っていた。

（なんてことを……！）

先の王家――エルスース家の者の特徴とされた、黒髪と紫の瞳を持って生まれてきたせいで、ガスカールが幼いころから異端視されてきたことを、彼女は当人から聞かされていた。

その事実の持つ意味や、結果として引き起こされた事態の顛末を、彼は当事者とは思えぬ淡淡とした口調で語ったものだ――その内容の悲惨さが嘘のように。

けれど、ナルレイシアは知っている。冷静に過去を受け入れた人間の心に、傷が残っていないわけではないということを。

傍目にはどう見えようと、ガスカールの心には、まだ癒えきれない傷があるのだ。

その瘡蓋を、意図的に掻きむしるフィディエールの行為は許し難いものだった。

「あなたねえ！」

意気込んで反論しようとしたナルレイシアを止めたのは、意外にも侮辱の言葉を投げかけられたガスカールだった。

「黙ってろ」

「だって！」

「お前が口を挟むとややこしくなるから、黙ってろと言っている」
なにがどうややこしくなるっていうのよ――!?
そう噛みつきかけたナルレイシアだったが、ガスカールの目を見たら、なにも言えなくなった……悔しいが、気迫負けしたのだ。
仕方なく、口を噤んで、リオライーシャを守ることに専念しようと思ったナルレイシアの耳に、ガスカールの淡々とした声が届く。
「ナサリエル公爵。貴公の許可は、必要ない。わたしは、アマンシールさまから、選定者であるその娘を守るよう言いつかっているのだから」
この言葉に、フィディエールが「はっ」と声を上げた。
「前王家の血を引く呪い子と、背神の選定者か！　当代さまも、なかなか気の利いたことをなさるものだ。おい、呪い子。知らないようなら教えてやるが、その娘は自らこの屋敷を訪れたのだ……畏れ多くも次代さまに係わる情報を買わないかと、わたしに持ちかけるためにな！　おかげで、あの騒ぎだ。こちらとしてはいい迷惑だ。それを聞いても、まだその娘を守ると言い張るか？　それとも、最初からお前たちが共謀して起こした騒ぎなのかな？」
ありもしないことを並べ立てながらも、フィディエールの瞳には己が優位を確信した光が宿っていた。

宮廷におけるガスカールの不安定な立場を、完全に理解し、またどうとでも動かせるという自信もあるのだろう。

「妙な疑いを受けたくないのなら、さっさと立ち去れ！」

声高に命じたフィディエールに応じたのは――しかし、ガスカールではなかった。

「興味深いお話ですね」

耳にした途端、うっとりと聞き惚れずにはいられぬ美声――。

もっと、その声をよく聞きたくて――その声の主を知りたくなって、思わず皆が、声のしたほうを振り返る。

廊下のほうから、姿を現したのは、神の化身としか思えない美貌の青年だった。

緑がかった金髪を、きれいに整えた彼は、純白の、高位神官にしか許されない衣装を身に纏っていた。

しかし、それはただの神官の装いではなかった。

なぜなら神官は、自らの属する神殿に因んだ色の肩掛けを羽織るものだが、彼が身につけているそれは、虹神七神――すべての色をたたえていたからだ。

しかも、その背後には神殿直属の兵士である神兵が従っている。

息を呑むほどあざやかにして、圧倒的な存在感を誇る一団だった。

さしもの傲慢大王――命名ナルレイシア――も、気圧された様子で、一歩後ずさった。
「な、なんだ、お前たちは……？　神官といえど、この屋敷に許可なく足を踏み入れるなど、許されることでは――」
言いかけるフィディエールの言葉を遮るように、先頭の青年が軽く頭を下げた。
「これは失礼を。わたしはスカルトード・ナネリーアン・フォスカリク――ディエーンにおける『奇跡及び神罰調査委員会』の長を務めさせていただいております。本日伺ったのは、つい先ほど出現した黄金竜について、早急なる調査の必要ありと判断したからです。みなさま、どうぞご協力くださいますよう――」
振る舞いこそ優雅で低姿勢だったが、そこには相手が従わずにはおれない威厳があった。
そして、その名乗りを聞いた途端、フィディエールは紙のごとき顔色になった。
「奇跡及び神罰調査委員会……」
オウム返しにつぶやく声は、まるで魂が抜け落ちたかのよう――。
後日、知ったことなのだが、俗世の権威や財との癒着が進む神殿内部にあって、神々のもたらす奇跡、あるいは罰に関する調査と認定が委ねられた『奇跡及び神罰調査委員会』だけは、いかなる俗世勢力の圧力も受け付けない独立性を保持している唯一の組織だということだった。

つまり、賄賂や脅迫で、動かせる相手ではないのだ。

フィディエールの敗北は最早明らかだった——しかし、彼は最後まで諦めようとはしなかった。

「あの騒ぎの元凶なら、この娘に違いない！　この娘は、選定者という尊き役目を負いながら、こともあろうか、金目当てに、わたしに次代さまに係わる情報を買わないかと持ちかけてきたのだ！」

ガスカールに告げたのと同じ内容を、繰り返すフィディエールを、しかしスカルトードは一顧だにしなかった。

その神々しい笑顔が向けられたのは——。

「ご無事でなによりでした、選定者殿。先ほど、最寄りの神殿に、この屋敷の近辺にて見つかったという証の硬貨が持ち込まれましたおかげで、居場所を特定することがかないました。とは言え、証の硬貨は御身のお役目を示すかけがえのない唯一の品……二度と紛失なさらぬよう、お気をつけ下さい。証の硬貨の消失は、選定者殿の資格の抹消を意味するのですから」

そう言うと、スカルトードはまるでガスカールもフィディエールも目に入っていないような態度で、ナルレイシアに近づいてきた。

その懐から、大切そうに取り出されたのは、あの東方人の結界術師に取り上げられたはずの

神聖硬貨――。

（夢のように綺麗だけど、このひと、スカーさん……あのスカーさんなのよね？　でもってスカーさんは奇跡だか神罰だかを調べる集団の会長さんで、リオライーシャさまの力が暴走したせいで出現したあの影の竜のことを調べるためにこの屋敷にいらしたってわけで……）

取り上げられたはずの神聖硬貨のことといい、なにがなんだかまるでわけがわからない――というのが、正直なところだったけれど、取りあえず、これでリオライーシャがフィディエールに連れ去られたり、自分が背神者として訴えられる心配はなくなったようだ。

そうと認識した瞬間、ナルレイシアは全身から力が抜けていくのを感じた。

視界の隅で、ぶるぶると震えるフィディエールを認めたような気もしたが、もう、意識を保つのも限界だった。

（元々、波瀾万丈な人生なんて、物語にしか求めてなかったけど、もう充分！　もうご免！　わたしはファティ・リンシャのお屋敷に戻って、本に埋もれて暮らすのよーっっ！）

幸福な未来図を夢見ながら、ナルレイシアは意識を手放した。

人生最大の冒険は終わったのだ――と、このとき彼女は信じていた。

エピローグ

やわらかな日差しが心地よい、うららかな午後のこと――。

魔法屋敷として名高い、ファティ・リンシャの屋敷の庭において、小さなお茶会が開かれていた。

規模こそ小さいけれど、出席者の顔ぶれは、実に豪華である。

なにしろ、このディエーンの当代柱神であるアマンシールに、隣国イアンダールの先代柱神だったというファティ・リンシャ、ガライラ大公国の柱神の縁者にして、ディエーンの『奇跡及び神罰調査委員会』の会長を務めるスカルトード、ディエーン屈指の名門貴族であるエルスカーネ公爵ガスカール――最後のおまけが、自分……ナルレイシアだった。

もっとも、ナルレイシア自身、新たな柱神となる人物を見極める『選定者』なのだから、充分立派な肩書きの持ち主なのだが、彼女にとってその役目は終わったものだったので、なんの意味もなかった。

「気持ちのいい午後だこと。ここしばらくは慌ただしかったけれど、こうしてまた、みんなでお茶を一緒にできて、こんなに嬉しいことはないわ。ねえ、ナーシア？」

朗らかに笑う老婦人に、名指しで同意を求められたナルレイシアは、少々引きつりながら「そ、そうですね」と答えた。

以前お茶を一緒したときは、面子の大半の正体を知らなかったから、それなりに楽しめたが……知ってしまったいまとなっては、同じ心境で楽しむのはほとんど不可能だった。

今日のこのお茶会だって、本音を言うなら固辞したかったのだ。

理由はもちろん――若干一名を除いて――畏れ多すぎる面々だからである。ガスカールの場合、出会いが最悪だったため、そういった意識はないのだが、やはりほかの三人に関しては、雲上人のように感じてしまうのだ。

それでも断らなかったのは、こんな機会でもなければ、恐らく二度と会えないだろうアマンシールにお礼を言うためだった。

あの大騒ぎが終息した後、ナルレイシアは彼に相談を持ちかけたのだ。

つまり、次代の柱神として、神宝が選んだのは斎王のひとりであるユーカリィヤではなく、その双子の妹リオライーシャだったことで、だ。

あれこれ気がかりなことを話しているうちに、なんだか不穏な流れになってしまったのだけ

れど――。

「還俗？」

意外そうに、首を傾げるアマンシールに、ナルレイシアはあることを尋ねていた。

「ユーカリィヤ嬢が、還俗したいと言っているのかい？」

「いいえ。ご本人はなにもおっしゃってません。斎王さまは皆神官の道を進まれ、還俗は許されないと以前聞きましたが、例外はないんでしょうか……？」

躊躇いがちに、けれど質問を撤回しようとしない彼女の様子に、なにか感じるところがあったのだろう、当代柱神は逆に問い返してきた。

「どうして、そんなことを知りたいのか、聞いてもいいかい？　事情によっては裏技……おっと、方法を模索できないこともないと思うのだけれど」

相談を持ちかけている身であるナルレイシアは、もちろん彼の失言には気づかないふりをした。

「はい。あの……次代さまであるリオライーシャさまだけでなく、ユーカリィヤさままで神殿

に入ってしまわれると、オースリン家はご親戚の方が継ぐことになるのですよね？」

あの、お世辞にも好感が持てるとは言えない面々のなかの誰かが。

ユーカリィヤに、殊更に「あなたは身体が弱いのだから」とか「無理をしてまた熱が出たらどうするのだ」とか、心配するように見せかけながら、呪文のように繰り返していたオースリン家の縁者たちのことを思い出すと、それだけで気分が悪くなる。

あんな連中に継がせるぐらいなら、ユーカリィヤが還俗してオースリン家を継いだほうが、よっぽど世のためひとのためになると思うのだ。

もっとも、理由はそれだけではないのだけれど。

「……まあ、直系がいるのに傍流が継ぐというのは、少々おかしなことではあるけれど、聞かない話ではないよ。それに、斎王の還俗を認めると、王家の養子という、微妙な立場の者を神殿の外に生み出してしまうことになる。この国の貴族は多かれ少なかれ始祖さまの血を受け継いでいるからね、下手をしたら王位継承にまつわる問題が起こりかねない」

そんな大事に発展する可能性など、頭になかったナルレイシアは、衝撃を受けると同時に自分の考えの足りなさを恥じた。

（王位継承問題だなんて……内乱の種をまくようなものじゃない）

今回、その芽のひとつをつみ取ったばかりだというのに、到底看過できるものではない。

「そうですよね……」

がっくりと肩を落としたナルレイシアに、アマンシールは慰めの言葉をかけた。

「選定者である君が、生臭い政治に詳しくなる必要はないよ。それより、ユーカリィヤ嬢を還俗させたいのは、オースリン家を継がせたいからだけではないんだろう？　よければ、そちらの理由も教えてはくれないかな？」

いえ、もう――と言いかける彼女に、アマンシールはにこにこ笑いながら「いいから、言うだけならただだから」と促した。

その灰色の双眸が、好奇心にきらきら輝いているように見えたのは――気のせいだろう、きっと。

そこで、ナルレイシアは先日、初めて会った第一王子ウォルカードのことを打ち明けた。彼とユーカリィヤが幼いころに出会って以来、親しくつきあっていたらしいこと、王子がいまでも彼女のことを非常に気にかけていることなどをだ。

「おふたりとも、まだ幼いといってもいいぐらい若くてらっしゃるから、これからどうなるかなんてわかりませんけど……ユーカリィヤさまが神殿に入られてしまったら、ある未来も消えてしまうと思って……すみません、考えが足りませんでした」

よほど意外な話だったのか、アマンシールが軽く目を瞠った。

「……時々文を交わしているのは知っていたが、なるほど、次期王太子ともあろうものが、君を拉致同然の強引な手段で呼びつけた理由もそれでわかった。カールは気を回しすぎるところがあってね、そのあたりのことは報告して来なかったんだ」

なるほどねえ――と、ひとりうなずく彼の瞳は、なんだかますます楽しげに輝いていた。

「あの、いえ、ですから……」

そんな簡単な話でないことはわかりましたから――そう前置いて、相談を撤回しようとしたナルレイシアに、アマンシールはしかし、「そういうことなら方法がないこともないよ」と意外なことを言い出したのだ。

「まあ、当事者たちがうなずいてくれたらの話だけれど……任せておきなさい」

あっさりと言い切られ、彼女はただうなずくことしかできなかった。

彼の言葉の意味が知れたのは、数日後のことだった。

次代決定の日が近いという理由で――決定もなにも、もう決まっていたのだが――親族たちの面会がいっさい禁じられた斎王院で、また熱を出して寝込んだというユーカリィヤを見舞うために部屋を訪れたナルレイシアは、寝台で半身を起こしている少女の姿を目にした瞬間、声も出ないほどに驚かされた。

そこにいたのは、短い髪を隠すために、金褐色の鬘をつけた――。

「リ……っっ！」

（リオライーシャさま――――!?）

目を白黒させるナルレイシアの前で、美しい露草色の瞳をした少女は、悪戯っぽい笑みに目を細め、自らの唇に指を当てた。

アマンシールが言っていた『方法』が、なんであったのか――最早考えるまでもなかった。双子の姉妹と話し合ってのことだろうが……彼はユーカリィヤとリオライーシャの存在を、まるごと入れ替えてしまったのだ！

リオライーシャが次代柱神であることは、救出されたときの彼女の衰弱が激しかったこともあり、しばらくは神殿にも報告しないように、とアマンシールから言われていたから、その言いつけを守っていたのだが、まさかこんな裏技を用意していたとは！

（そりゃあ、どうにかできないかって相談したのはわたしですけど、こんなのって、こんなのって……アマンシールさま、大胆すぎますーっ！）

常識人に見えながら、実は非常識の化身――裏技の達人、でもいいかもしれない――であることが判明した当代柱神に向かって、ナルレイシアは声にはならない叫びを上げたのである。

「それで、不埒者の公爵には、どんな処分が下ったの？」

物思いに耽っていたナルレイシアの意識を、現実に引き戻したのはファティ・リンシャの声だった。

灰青色の穏やかな目が向けられているのはガスカールだ。

「公式にはなにも……明らかになりますと、社会に及ぼす影響が大きすぎる人物ですから」

彼の言葉に同意したのはスカルトードである。

「神殿上層部でも、今回のことは神罰でなく、奇跡として処理するつもりのようですよ。王族に連なる御方が神罰を受けたというのでは、外聞が悪すぎますからね。あれはロスタロイドを破壊しかねないほどの大地震をなだめるべく、黄神さまがお力の一部を割いて下さったのだと……まあ、そういう方向で片付ける予定だと聞いてます」

ふたりの答えは、ファティ・リンシャにはあまり面白いものではなかったようだ。

「まあ」

眉宇をひそめ、不機嫌そうな声を上げる。

「あんなのを野放しにして、大丈夫なの？　まさか、ナーシアに逆恨みして、また暴挙に及ぶような心配はないのでしょうね？」

老婦人の不満顔が、自分の身を心配してのことだと知り、ナルレイシアはじぃん、と胸の奥が熱くなった。

（本当に、なんて良い方なのかしら……）

いついつまでも、おそばに仕えたい――と、心底から彼女は思った。

一方、ナルレイシアのことはともかく、ファティ・リンシャの心を不安にさらすつもりは皆無と思しき黒髪の青年は、「大丈夫です」と請け合った。

「処分なしというのは、あくまで表向きのことで、家人総入れ替えの上、病を理由に屋敷から出ないように沙汰が下されるはずですから。事実上の蟄居謹慎処分です。動く配下もいなくなるのですから、悪巧みなど、したくともできないでしょう」

「神殿のほうでも策を講じますから、ご安心ください」

と言ったのは、神もかくやという美貌の青年。

「今回の件に関しましては、あの方にはあれこれ触れ回っていただきたくないことが多々ありますから、そのあたりのことは、口に出そうとしても出せないよう、神殿の秘術を使わせていただく予定です。ああ、命に別状のある術ではありませんから、後々不審を招くこともありません」

微笑む姿は、まさに眼福――なのに、どことなく恐ろしく感じるのはなぜだろう。

「無事に次代も決まったことだしね」

一安心だと言って微笑むアマンシールに、つい複雑な目を向けてしまったナルレイシアに罪はなかろう。

「生まれて間もなく養女に出されたという妹御も、無事にオースリン家に戻って、家督相続のお許しをいただくために、近々陛下にお目通り願うという話ですし、終わってみれば、落ち着くべきところに落ち着いたというところでしょうか」

他意のない——多分、きっと——スカルトードの言葉に、心臓をぎゅっと捕まれたような衝撃を覚えたが、ナルレイシアは懸命に笑顔を保った。

ファティ・リンシャが、ほっとした笑顔を浮かべた。

「あなたたち全員が、口を揃えてそう言うからには、取りあえずは安心しても大丈夫なようね」

その言葉に、ナルレイシアは改めて、自分の人生最大の災難が、ようやく——本当に終息したのだと実感した。

ファティ・リンシャの台詞の一部に、不穏な響きを感じなかったといえば嘘になるが、目先の幸福に目の眩んだ彼女は、あっさりと気づかなかったことにした。

（ああ、やっと……あの夢のような毎日に戻れるんだわ。本を読んで、本を修理して、本を整

理して……山のような本に囲まれたあの幸せな生活に！）

しかし、うっとりしている彼女の意識は、ファティ・リンシャの次の言葉で、氷山漂う北海にたたき込まれた。

「よかったこと。ナーシアは、これからまだあと二人の柱神を見極めなければならない、大事な身体ですものね」

人間、あまりにも思いがけない事態にぶつかると、反応らしい反応も示せなくなるものだと、ナルレイシアは身を持って知ることとなった。

もちろん、全然嬉しくはなかった。

一枚。二枚。三枚。四枚。

テーブルの上に並べられた四枚の神聖硬貨を前にして、ナルレイシアは泣きそうだった。

それは、通常出回っている虹神の横顔を刻まれたものではない。

新たに柱神となる者を見極める選定者の元へ辿りつくべく定められた、『証の硬貨』と呼ばれるものだ。

この『証の硬貨』を持っていることが発覚して、ナルレイシアは神殿に連れて行かれ、選定者と認められ……挙げ句死にそうな目にあいながら、それでもなんとか務めを果たした。

そのはずだ。

だのに――だ。

「よく、ご覧なさい。一枚だけ、硬貨の縁の内側が、光を放っているでしょう？　これは、無事に正しく務めを果たしたという徴で、選定者にとって、なにより誇らしいものなのよ」

ファティ・リンシャの優しい声は、「あなたは最善を尽くし、最良の結果をもたらしたのよ」とつづき、ナルレイシアの心を少しだけ慰めてくれた。

そう――あくまで、少しだけ。

なぜなら、その一枚を除く硬貨の縁には、『任務完遂おめでとう（勝手にナルレイシアが命名した）！』の徴が顕れていなかったからだ。

「三枚……」

虚ろな目で、並んだ硬貨を見つめる。

「一枚、二枚、三枚……やっぱり、三枚」

リオライーシャという、このディエーンの次代柱神を見極めたことで、すっかり仕事は終わったものだと信じていたのに――あと三枚！

（リオライーシャさまを見つけたことで、一枚だけ徴が顕れたってことは……もしかして、わたしってばあと三人、柱神さまを見つけなきゃならないってことなのっっ!?）

気が遠くなりそうだった。

いや、それよりなにより。

「いやーっっ！　やめてーっっ！　わたしは本に埋もれて暮らしたいだけなのに、なんだってこんなことになるのよ――――！」

活字中毒者である自覚のある銀髪の老婦人と、緑がかった金髪の青年は、思わず叫び出した少女に、深い同情をたたえた視線を送ったが――それだけだった。

不幸中の幸いの権化（ごんげ）と呼ばれる少女の伝説は、この先も増える一方で、止まることはなさそうだった――。

せつない夏の思い出

ディエーン王国王都ロスタロイドは真夏にさしかかろうとしていた。

「夏ですねえ」

その王都にあって、家主の機嫌次第で、いくらでも気温や湿度を――精霊たちの働きによって――変化させられる屋敷の庭で、緑がかった金髪の、この世のものとも思えぬ美貌の青年が、ミントの冷茶のはいったグラスを手に、のんびりとつぶやいた。

「そうねえ」

と、おっとりと答えるのは、この屋敷の女主人である初老の婦人で。

「それがどうした」

と、とりつく島もない言葉を発したのは、女主人の養い児同然の扱いを受けている、黒髪と紫水晶の双眸を持つ青年だった。

「いやあ、いくら精霊たちの恩恵で、過ごしやすい環境を確保されてるとは言っても、ファティ・リンシャとしては、たまにはその季節ならではの楽しみを謳歌なさりたいんじゃないのかな……なんて、思っただけのことでして。気の回しすぎでしたら、本当に申し訳ありませんが」

「そうねえ……」

のんびりとした口調で、初老の婦人は首をかしげた。

「精霊たちに甘やかしてもらってばかりでは、確かに老いる一方よね。かといって、うちの屋敷はすでに、簡単には崩せない規範ができてしまっているから……後は……避暑？」

首をかしげてそうつぶやくファティ・リンシャに、金髪の青年――スカルトードがぽん、と手を打った。

「避暑！　優雅な響きですよねえ。ここのところ、ばたばたしてましたから、骨休めもかねて、一夏を別荘で過ごすというのは如何でしょう？　大伯父の手持ちの別荘がいくつかあるんですよ」

そう言いながら、スカルトードの目は、一緒にテーブルを囲む少女に向けられていた。

金色の髪と黄玉の瞳を持つ、その少女の名はナルレイシアという。

「避暑、ですか……」

これはご一緒に、と誘われてるんだろうな――と思いつつ、彼女は考えこんでしまった。

避暑という言葉には、正直心が動かされる。行く先がスカルトードの大叔父である方の持ち別荘だというところにも、大いなる好奇心を覚えずにはいられない。聞いたところ、スカルトードとその方は大変似ているという話だからだ。

（スカーさんがお年を召したらどうなるのか、見てみたい！　すっごく見て見たい！）

けれど……。

どうしたものかと黙り込んだナルレイシアの隣で、先程から不機嫌な顔でティーカップを口に運んでいた黒髪の青年――ガスカールが初めて口を開いた。

「馬鹿馬鹿しい。こいつにちんたら遊んでいる暇なぞあるか。どれだけ『宿題』が残っているか、お前とて忘れたわけではあるまい」

その言葉に、ナルレイシアはずずん、と肩が重くなったような気がした。

（しゅ、宿題……）

間違ってはいないのだが、なぜ、この言葉はこんなにも、心を重くする威力を秘めているのだろう。

そんな彼女の心中に気づいたのか、屋敷の女主人が、穏やかに割って入ってきた。

「そんなに緊張ばかり強いられては、ナーシアだって身がもちませんよ、カール？　スカーだってなにも一夏まるまるだなんてつもりはないのでしょうし、たまには心身ともに寛ぐことも大切ですよ。ただでさえナーシアは、ついこの間、大変な騒ぎに巻きこまれたばかりなんですからね」

あなたは、思いやりに欠けるひとではなかったでしょう？

やんわりと窘める口調のファティ・リンシャに対し、いつもはおとなしく引き下がることが圧倒的に多いガスカールは、しかし今回ばかりは退かなかった。

「鉄は熱いうちに打て、というのが、あなたの教育方針だったと記憶してますが？」

ほんの一瞬、そう言う彼の紫の双眸に、恨みがましげな光が過ったと思ったのは……ナルレイシアの気のせいだろうか。

しかし充分すぎるほどに人生経験を積んだ女性は動じなかった。

「あら、男の子と女の子では、色々と違って当たり前じゃないの。第一、あなただってナーシアにあなたとそっくり同じ人間になってほしいわけじゃないでしょう？」

「そういう問題ではありません。わたしはせめて、もう少し慎重に行動する癖ぐらいは身につけてもらいたいと思っているだけで……」

思いっきり考えなしと評されたも同然の台詞に、ナルレイシアの機嫌は悪化する。

いつも、いつもガスカールはこうなのだ。

そりゃあ、自分でも、過去を振り返ったとき、いくつかのことに関しては思慮が足りなかったとか慎重さに欠けていたとか性急すぎたとか、反省すべき点があるのはわかっているけれど。

（でも、でも、大半はわたしに取り憑いた『悪運』――もしくは凶運という――が原因だったんですもの！　そんなの、用心だけで回避できるもんじゃないわーっっっ）

そう、ひとの思惑などとは無関係に降りかかってくるからこそ、『運』と呼ばれるのだ。

場の空気がひんやりとしたことに気づいてか、スカルトードがとりわけ明るい声で提案を持ち出した。

「ファティ・リンシャのおっしゃることが正しいですね！　人間、たまには全力で寛ぐことも必要です。やっぱりここは、避暑にいくべきですよ。そうして一時、世俗のことは棚に上げ……じゃない、忘れて、綺麗に心と命の洗濯をしてから、改めて問題に取り組もう、というのが理想的じゃないでしょうか？　あ、カール、君は来なくていいですよ。一緒に来ても、どうせ四六時中ヴィル・ダカールに張りついては、ぎゃいのぎゃいの緊張強いることばっかり言うに決まってますからね」

相手の反論を先に封じ込めるやり方は、印象は違うけれど、ファティ・リンシャのそれと酷似していた。

どう言葉を返すべきかと、目を伏せ、考え込んだガスカールを余所に、スカルトードとファティ・リンシャは勝手にこの夏の計画をたてていく。

「夏といったら、やっぱり海ですかねえ」

「海！　素敵だわ、この年になったら、さすがに泳ぐのは無理だけれど、砂浜の散歩と貝殻集めは王道よね。あと、波打ち際での水遊びとか……」

昔の記憶を辿っているのか、ファティ・リンシャの瞳は楽しげに輝いていた。

それとは逆に、楽しげどころではなく、思いっきり恐怖に顔を引きつらせたのはナルレイシアだった。

「海！」

叫ぶと同時に、彼女の黄玉の双眸は恐怖と絶望に染め替えられた。

「海……海は、いやぁぁっっっ！」

思わず叫んだ彼女の脳裏には、初めて訪れた海における、悲しく切ない記憶が甦っていた。

それは、彼女が十歳の夏の出来事だった。

ナルレイシアは十歳にして、初めて海を目にした。

彼女の身の回りでは、どうにも理屈で説明できない不可解な事故や災難が起こることに気づいた家族が、彼女をなるべくそうした事態の起こりやすい環境から遠ざけていたせいだった。

それでいうなら、彼女を海沿いの土地に連れ出すこと自体、危険な行為であるはずだったのだが、この件を強硬に主張したのは、彼女の兄だった。

「このまま囲いこんだままじゃ、ナーシアが可哀相すぎます！　父さんはナーシアを一生家に

閉じこめておくつもりなんですか？」

父親は渋面で応じた。

「無論、そんなつもりはない……ないが、夏の海ともなれば、危険も多かろう。毎年、子供の水の事故は当たり前のように起こっているんだし……ただでさえ、普通ではあり得ないほど悪い運を引き当てるあの子を連れ出すのは……」

どうにも気が進まないといった顔の父親に、兄は必死にかけあってくれた……らしい。

「じゃあ、ぼくが必ずそばについてます！　あの子が危険なことにならないように、一刻だって目を離さずに！」

「せっかくの避暑に、妹のお守りばかりやっていられるか？　いや、お前がそのつもりでも、ナルレイシアが溺れたりしたらどうする？　とてもお前では助けられないぞ？　知らないようなら言っておくが、溺れかけた人間は無我夢中で暴れるものだからな。子供を助けるために飛び込んだ大人が逆に溺れることだって珍しくはないんだ」

「じゃあ、ナーシアには泳ぐのだけは我慢してもらって、水遊びだけで辛抱してもらいます！　それだって……たとえそれだけだって、あの子にとっては楽しいことに違いないんですから！」

ここにナルレイシアの母親が加勢した。

「わたくしからも、お願いしますわ、あなた。あの娘は本当は、外の世界のことを知りたくて

たまらないんですわ。けれど、悪運憑きの娘だなんて評判を立てられたものですから、望んだこともたやすく口にできずにいるのです……あの子がわたくしに、あの子が生まれる以前に家族で訪れた休暇の思い出を尋ねるときに見せる、あの淋しそうな光を思い出すと……」

不憫でなりません。

妻と息子の二段攻撃には、さしものダカール商会社主も――対象が末娘だったこともあり――降参するしかなく、ダカール家所有の海辺の別荘におけるその夏の滞在は決定されたわけである。

「海……」

言葉としては知っていても、実物を目にしたのは初めてだったナルレイシアは、大きく目を瞠り、次いで歓喜した。

そこはダカール家所有の土地であったから、もちろんほかに入りこむ者もなく、安全な場所だった。

元々は彼女に憑いている悪運のせいで、ごく普通の行動をとるだけでも、すかさず周囲から

待ったがかかる日常であったから、ナルレイシアはすぐにでも波打ち際に駆け寄り、水遊びしたい想いを押さえつけて、兄を振り返った。

「ええっと……兄さま。ありがとう。本当に、こんなに綺麗なところに連れてきてくれてありがとう！　すごい……とても、綺麗！」

時刻は、まさに夕暮れの奇蹟の瞬間。

水平線に夕日が映えて、最高に美しい瞬間だった。

（うわっ、なんって、綺麗……！）

その後に起こった事故さえなければ、ナルレイシアの初めての海の記憶は、ただただ美しいもので終わったかもしれない。

だが——しかし。

「あ、綺麗な貝殻が……桜色で、ほんとに綺麗。兄さま、拾ってもいい？　いいでしょう？」

可愛いおねだりを口にし、兄を振り返ったナルレイシアは、なぜだか驚愕に目を瞠るそのひとの顔しか見えなかった。

「……兄さま？」

尋ねた答えを、耳で確かめることはできなかった。

その日の海の状況では、決して起こり得ない高波が生じ、それが彼女を浜辺から奪いさった

からである。

「ナーシア！　ナーシア、ナーシア、ナーシア！」

兄の必死な、自分の名を呼ぶ声だけは聞こえていたと思う。

それが、初めて海沿いの別荘を訪れたときの、記憶のすべてだ。

だから、わからないことは、いまでも山ほどあるのだけれど。

ただ、あの高波に襲われた瞬間の恐怖だけは忘れない。

本当に、なにが起こったのかわからなかった。

必死に自分を呼ぶ兄の声が聞こえたと思った次の瞬間には、もう波に攫われ、海中にあったからだ。

婦女子はみだらに肌や体の線を露出するべきではないという父の方針のため、ナルレイシアは――水遊び用とは言え――生地をたっぷり使った衣装を身につけていた上、それまで、水遊び以上のことをしたこともなかったため、たちまち恐慌状態に陥った。

「な……？」

声を出そうとした瞬間、大量の水が口と鼻から流れ込んできたこともパニックに拍車をかけた。

特に鼻の被害が大きかった。脳天を突く、強烈且つ独特な痛みに見舞われ、彼女は遮二無二空気を求め、手足をばたつかせた。

しかし、いくら水遊び用の、普段よりは丈の短い服を着ていたとはいっても、水着とは段違いに布地が多いわけだから、手足の動きは阻害される一方だった。

さらに言うなら、水の力は圧倒的で、泳ぎの基本さえ知らない少女がどう頑張ったところで、抗いきれるものではなかった。

息ができない上に、満足に手足も動かせない——とどめとばかりに、ふくらはぎに違和感を覚えた次の瞬間、足が攣ってしまったのだから……最悪だった。

腕だけは、必死に動かしていたけれど、はっきり言って絶望的な状況だった。

(やだ、死にたくない……！　死にたくないーっっっ！)

そう思ったのを最後に、ナルレイシアの意識は闇に閉ざされた——。

「……まあ、そういうわけで、海は駄目なんです」

ナルレイシアは顔を赤くしたまま、突然の奇声の理由説明をそう締めくくった。

笑われるかと思ったが、同席者三人は誰も――意外に思ったのだが、ガスカールですら――笑わなかった。

そのことを告げたとき、裏山に住む師匠である老人は、大笑いしてくれたのに、だ。

「いえ、そういう事情があるのなら、海に恐怖感を抱いてしまうのも無理はないと思いますよ」

スカルトードがやさしく声をかけてくれたかと思えば、銀髪の老婦人が、しみじみした口調でこうつづけた。

「あなたが、いまここにいることを、虹神さまがたに感謝するわ」

心からそう思っているのだとわかるファティ・リンシャの言葉に、ほんわりと胸の奥が温まったような気がしたナルレイシアだったが……第三の呆れたような声のせいで、全部台無しになった。

「よく、それで生きてるな」

当事者と発言者を除くふたりから一斉に非難の声が飛んだ。

「「カール！」」

追記するなら、上品な老婦人の、容赦のないこぶしが、黒髪の青年の後頭部に炸裂するのを、ナルレイシアは確かに目撃した。

もっとも、ガスカールの発言に類似したことは、事後さんざん聞かされたものだから、あまり腹立たしくは思わなかったのだけれど。

「いえ、まあ……さんざん、生きてるのは奇蹟だとか、生きてるのはおかしいとか、酷いのになるとなんで生きてるんだってまで言われちゃいましたから。どうも気絶したのがかえって良かったらしくて、攫われた浜辺から少し離れたところに、漂流物よろしく打ち上げられてたらしいんですよ。おまけに、波に攫われてる最中に、岩の出っ張りに引っかけたらしくて、攣らなかったほうの足の裏、ざっくり切っちゃって……一ヶ月以上、杖なしには歩けなかったんですよね。溺れたことより、そっちの方が実を言うと堪えました」

「それは……」

「また、なんと……」

スカルトードとファティ・リンシャは、揃ってなにか言いかけたものの、言葉が見つからなかったのか、結局つづきを口にすることはなかった。

ふたりに同時に非難されたガスカールは、さらに非難を買わぬための用心か、反応を返しては来なかった。

少しだけ、気まずい沈黙が場を支配した後、わざとらしい咳払いとともに、スカルトードが言った。

「……まあ、そんな恐ろしい経験をしている以上、ヴィル・ダカールが海で楽しく過ごせるとは思えませんから、別荘の候補地は違うところにしましょうか」

この提案に、ファティ・リンシャも即座にうなずいた。

「ええ、そうね。それがいいと思うわ！」

ガスカールはすでに、我関せず状態に突入していた。

そして――当事者であり、しかも労られている立場にあるナルレイシアは――少々困惑していた。

実のところ、先程打ち明けた事情は、彼女の決定的な海嫌いの理由ではなかったのだ。

それはもちろん、溺れてパニクったし、足攣ってさらにパニクったし、意識を取り戻したとき、身に覚えのない怪我を負ってて最悪、とか思ったのは確かだったけれど。

なにより！

絶対、二度と海には近づかないと、心に誓ったその元凶は！

自宅の裏山に、いつからか住みついていた老人の言葉だった。

「お嬢は運が良かったの」

無事に足の怪我も治り、彼の庵を訪ねたときのこと。

「知っているか？　海にはフジツボという生き物がいてな、海で怪我した人間の体内に、うようよと卵を産みつけることがあるんよ。そうして、幼虫はその人間の体内で繁殖してな、やがて育ったフジツボは、あるときいっせいに腹を食い破って飛び出してくるという話だ」

お嬢がそんな目にあわなくて、本当に良かった、良かった――いや、まだまだ油断は禁物かな？

きちんとした格好さえすれば、目にした十人中十人が、「若々しい素敵なお爺さま」と、声を揃えて褒め称えるに違いないそのひとは、子供にありもしない話を聞かせては、信じ込ませて泣かせる名人だった。

あの師匠の悪趣味な冗談のせいで、半年近くを戦々恐々として過ごしたことは……ナルレイシアとしては、一生秘密にしておきたいことだった。

いまとなっては、半年もの間、いつお腹が破れてフジツボが飛び出してくるか恐怖に戦いていたことなど、笑い話のネタにしかされないとわかっているから尚更である。

そうとわかっているのに、それでも、海と聞くとフジツボの恐怖に縛られてしまうというのも変な話であるけれど。

（でも、ま、海の話はなくなったみたいだし、それはそれでよしとしようかな？）

ほっと息をつきかけたナルレイシアは、しかし次の瞬間、スカルトードが発した言葉に拒絶反応を示した。

「……では、山はどうでしょう？　幸い大伯父（おおおじ）は、山荘も持っていることですし」

ナルレイシアの絶叫が、響き渡る。

「や、山！　山も駄目（だめ）エエエエッツッ！」

ナルレイシアにはもしかしたら一生、避暑（ひしょ）は無理かもしれないと、同席している誰もが思った。

真理かもしれない。

あとがき

こんにちは、前田珠子です。

ようやく『黄の章』完結の『天を支える者』第四巻をお届けいたします。『黄の章』って？と思われる方は、是非本文をお読み下さい。不幸中の幸いの権化たるナルレイシアが、本に埋もれたハッピーラッキーパラダイスな日々を手に入れるには、今少しの時間（プラス受難？）が必要なようです（笑）。

前巻のあとがきで、男衆にも格好いい見せ場を……とか、言ってたにも拘わらず、蓋を開けてみると、なーんか、ヒロインお呼びプチヒロインの危機で一番活躍したのは、銀髪の老婦人だったような気がしないでもありません。

いえ、もちろん男衆にも見せ場はありますが……大立ち回りとか、させてあげられなかったのが、ちょっと残念。時代劇の殺陣を見て研究しなければ。美貌の片割れに関しては、着飾らせることができて楽しかったです。

でも、ヒロインのナルレイシアは、いい服を着ることはあっても、着飾ったことって（いつも騒ぎの渦中にあるから）ないんですよね。いずれ、綺麗に着飾らせてあげたいです。

今回ちらっと登場して、雲行きが怪しくなったとたん、さっさと退散したひとは、このあとも登場する予定。『天支』初登場の東方人――きっと怪しい方面で活躍してくれると思います。

今回収録の『せつない夏の思い出』は、以前サイン会に来て下さった方に配布したコピー本に書いた小編です。今回のラストから、間もないころのエピソードで、ナルレイシアの海恐怖症の原因となった事故が描かれてます。

機会があったら、彼女が雷恐怖症、土砂崩れ恐怖症、馬恐怖症、高所恐怖症……等々の原因となったエピソードも書きたいと思ってます。

今回も、挿絵の明咲トウルさまを含め、関係者の皆様には、大変お世話になりました。この場を借りて、お礼申し上げます。

読者の皆様には、是非、感想を教えていただきたいです。色気に欠けている自覚はありますので、できればそれ以外で（笑）。

それでは、また、次の本でお会いできますように――。

平成十九年　春

前田珠子

※この作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件などにはいっさい関係ありません。

この作品のご感想をお寄せください。

前田珠子先生へのお手紙のあて先

〒101－8050　東京都千代田区一ツ橋2－5－10
集英社コバルト編集部　気付
前田珠子先生

まえだ・たまこ

1965年10月15日、佐賀県生まれ。天秤座のB型。『眠り姫の目覚める朝』で1987年第9回コバルト・ノベル大賞佳作入選。コバルト文庫に『破妖の剣』シリーズ、『カル・ランシィの女王』シリーズ、『聖獣』シリーズ、『聖石の使徒』シリーズ、『天を支える者』シリーズ、『ジェスの契約』『トラブル・コンビネーション』『陽影の舞姫』『女神さまのお気の向くまま』『万象の杖』『月下廃園』など多数の作品がある。興味を覚えたことには積極的だが、そうでない場合、横のものを縦にするのも面倒くさがる両極端な性格の持ち主。趣味と実益を兼ねてアロマテラピーに手を出したものの、今ではすっかり実益のほうが大きくなり、趣味とは言いがたくなりつつある。次こそは優雅な趣味を持ちたいと身の程知らずにも思っている。



天を支える者4

COBALT-SERIES

2007年3月10日　第1刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著者　前田珠子

発行者　礒田憲治

発行所　株式会社集英社

〒101—8050
東京都千代田区一ツ橋2—5—10
(3230) 6268 (編集部)
電話　東京 (3230) 6393 (販売部)
(3230) 6080 (読者係)

印刷所　大日本印刷株式会社

© TAMAKO MAEDA 2007　Printed in Japan
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替え致します。購入された書店名を明記して小社読者係宛にお送り下さい。
送料は小社負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したものについてはお取り替え出来ません。

ISBN978-4-08-600884-6 C0193

〈好評発売中〉 コバルト文庫

本好き少女の波乱万丈ファンタジー！

前田珠子 〈天を支える者〉シリーズ

イラスト／明咲トウル

天を支える者

天を支える者2

天を支える者3

天を支える者 古懇唄

天を支える者 古懇唄2

天を支える者 古懇唄3

天を支える者 古懇唄4

天を支える者 古懇唄5



〈好評発売中〉 コバルト文庫

選ばれし子供たちが、世界を守る。

前田珠子 〈聖石の使徒〉シリーズ

イラスト／山本鳥尾

聖石の使徒
其は焔をまとう者

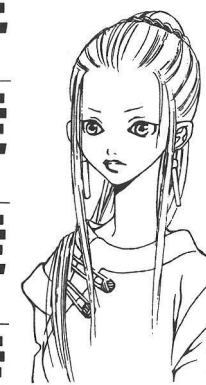
聖石の使徒
其は力を放つ者

聖石の使徒
其は天秤をかざす者Ⅰ・Ⅱ

聖石の使徒
其は水に遊ぶ者Ⅰ・Ⅱ

聖石の使徒
揺籃の瞳

聖石の使徒
蒼の組木箱





〈好評発売中〉 コバルト文庫

美少年コンビが暗躍する魔性を斬る!

前田珠子 〈魅魍暗躍譚〉シリーズ

イラスト／田村由美

魅魍暗躍譚

碧眼の少年(前編)(後編)

髪と瞳の色を奪った魔性を探す甲斐。途中、行き倒れの志摩を助けたことから、没落した名家の当主・隠岐と知り合って!?



月乃守家の姫君・遠江(とおとうみ)は美少女だが相当の猫かぶり。偶然異母兄の甲斐と再会を果たすが、魔性の陰謀が彼女に迫り…!?

魅魍暗躍譚

月読見の乙女(前編)(後編)

〈好評発売中〉 コバルト文庫

選ばれし少女よ、魔性に立ち向かえ！

前田珠子 〈破妖の剣〉シリーズ

イラスト／廈門 潤



漆黒の魔性

白焔の罠

柘榴の影

紫紺の糸（前編）（後編）

翡翠の夢1～5

鬱金の暁闇1～3

女妖の街 破妖の剣 外伝①

ささやきの行方 破妖の剣 外伝②

忘れえぬ夏 破妖の剣 外伝③

時の螺旋 破妖の剣 外伝④

魂が、引きよせる 破妖の剣 外伝⑤

呼ぶ声が聞こえる 破妖の剣 外伝⑥

コバルト文庫 雑誌Cobalt

「ノベル大賞」「ロマン大賞」

募集中!

集英社コバルト文庫、雑誌Cobalt編集部では、エンターテインメント小説の新しい書き手の方々のために、広く門を開いています。中編部門で新人賞の性格もある「ノベル大賞」、長編部門ですぐ出版にもむすびつく「ロマン大賞」。ともに、コバルトの読者を対象とする小説作品であれば、特にジャンルは問いません。あなたも、自分の才能をこの賞で開花させ、ベストセラー作家の仲間入りを目指してみませんか!

〈大賞入選作〉
正賞の楯と副賞100万円(税込)

〈佳作入選作〉
正賞の楯と副賞50万円(税込)

ノベル大賞

【応募原稿枚数】 400字詰め縦書き原稿用紙95～105枚。
【締切】 毎年7月10日(当日消印有効)
【応募資格】 男女・年齢は問いませんが、新人に限ります。
【入選発表】 締切後の隔月刊誌Cobalt12月号誌上(および12月刊の文庫のチラシ誌上)。大賞入選作も同誌上に掲載。
【原稿宛先】 〒101-8050 東京都千代田区一ツ橋2－5－10(株)集英社
コバルト編集部「ノベル大賞」係
※なお、ノベル大賞の最終候補作は、読者審査員の審査によって選ばれる「ノベル大賞・読者大賞」(大賞入選作は正賞の楯と副賞50万円)の対象になります。

ロマン大賞

【応募原稿枚数】 400字詰め縦書き原稿用紙250～350枚。
【締切】 毎年1月10日(当日消印有効)
【応募資格】 男女・年齢・プロ・アマを問いません。
【入選発表】 締切後の隔月刊誌Cobalt8月号誌上(および8月刊の文庫のチラシ誌上)。大賞入選作はコバルト文庫で出版(その際には、集英社の規定に基づき、印税をお支払いいたします)。
【原稿宛先】 〒101-8050 東京都千代田区一ツ橋2－5－10(株)集英社
コバルト編集部「ロマン大賞」係

★応募に関するくわしい要項は隔月刊誌Cobalt(1月、3月、5月、7月、9月、11月の18日発売)をごらんください。

9784086008846

ISBN978-4-08-600884-6

C0193 ¥419E

定価 本体419円＋税

1920193004199



コバルト文庫